柳の雅話

宰主★郎路生麻

Pensoj fiu as trans la land-limon

The Senryu Zasshi No.335

四月號

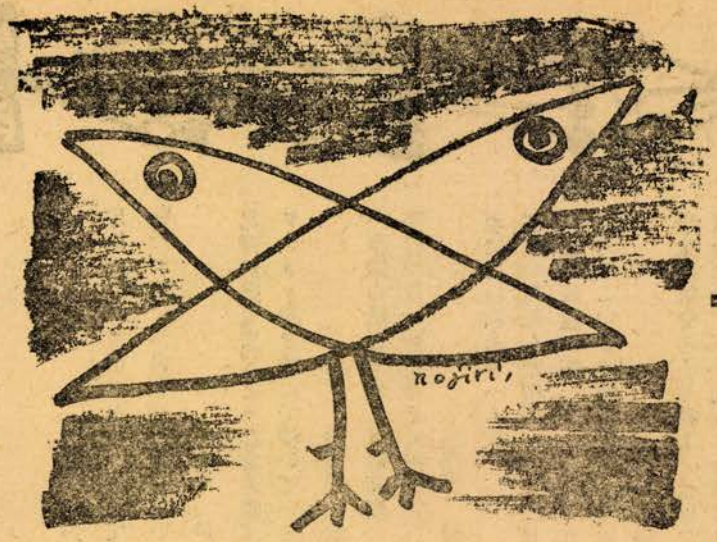
四月號目次

（昭和三十年）

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介
窓口談義……麻生路郎…（三）
新聞碁譜其他……福田山雨楼…（三四）
板東千代美さんを訪ねて……丸尾潮花…（三一）
新川柳鑑賞……麻生路郎…（一〇）
緑之助氏と三十年……吾郷玲人…（二四）
ふるさとを読みて……堀口塊人…（二五）
中国人と日本人……白砂旋風…（一三）
壇の浦（上）……富士野鞍馬…（一七）
郵政相の落選……長野文庫…（二四）
許昌の腕……東野大八…（九）
芹花さん……酒井ひか平…（一〇）
江戸川柳に詠まれた市川団十郎……阿達義雄…（二六）
BK放送川柳……中島生々庵選…（三五）
飛燕往来……（三六）
社の黒板……（三三）
ティールーム……（一一）
★
川柳塔……麻生路郎選…（四）
同舟近詠……諸家…（八）
近作柳樽……麻生路郎選 北川春巣選…（一四）
一路集「失業」……須崎豆秋選…（三三）
「名士」……三鴨美笑選…（三三）
各地柳壇……（二九）
川柳第二教室……戸田古方…（二一）
不朽洞会から……（三四）
柳界展望……（三五）
公私雑記……（三五）

車は新装・コース最短・・
なると号で鳴門観潮

豪華新装なると号　淡路島まで2時間40分
なんば発 8.10 13.15 19.10
鳴門観潮クーポン　なんばから往復700円
南海電車



窓口談義

近ごろ相撲を觀て

私はこどもの時から相撲が好きだった。よく袖を千切って来て叱られたものだ。私の高商時代に新聞社の主催で関西の学生相撲が始められた。そして柔道の選手をしていた私は学生相撲の第一回選手として出場させられた。学校で力士を二人雇ってくれて寒風の吹きすさぶ校庭の土俵で一ン日相撲の稽古をさせられた。私は相撲を取るのは好きだったが、相撲見物には出かけなかった。時に誘われて見せてもらった位なものである。

この間「遙爽」から招待されたので行って観る気になり、九日目の勝負を見た。始めは観ていて左程面白いとも思わなかった。それよりも自分も土俵の土を踏みたいような心が動いておかしかった。一時半頃出かけたので幕下力士の相撲が見られた。最初に驚いたのはあまり偉大な肉体の持主がいなかったことである。日焼けした痩ッぽちの力士やこども〳〵した顔の力士に一種の他愛なさを感じさせられた。一所懸命なんだろうが、相撲そのものも竜虎相撃つと云う堂々たる相撲は観られなかった。その代り本人も予測し得ないような奇抜な相撲もあった。これは川柳の初心者が、予測し得ない句を作って、けなされたり、ほめられたりするのと、大差がないように思った。それが幕内力士になると少しおもむきが違って来る。仕切り直しも、イヤに落ちつき払って

仕切り直し邪魔くさそうに立ち上り

と云った風情である。からだそのものも所謂力士らしい力士にはなっているが、昔の力士にくらべると、なんだか小型なような感じがした。知性が発達したせいか間抜けたようなのんびりしたところがない。それにガッチリと理詰めの相撲を取っているようだ。時に自分の力で負ける以外は、力の相違だなアと思わせられるような相撲ばかりだ。変な例を引くようだが昔の力士が万葉の歌人だとすれば今の力士は新古今の歌人だと云うほどの違いがあるようだ。

それに、横綱が何人も居るのと四本柱がないのが、私のような昔の相撲を見たものには少し物足りなかったが、いつのほどにか、ひき入れられ、力士と一緒になって仕切ったり、押し出したりしている自分を感じた。自分ならああ脆くはやられないのにと云う力の入れ方もしていた。何事でもここまでこなくては面白味は出て来ないものである。川柳でも、自分ならあんな拙ずい句はつくらないとか、あそこをこうすれば、もっといい句になるのにと思う熱があってこそ進歩も上達もあるのである。強い者が勝ち、巧い作家がいい句を作るものだと始めからきめてかかるようでは何んの楽しみも生じない。時には番狂わせもあるので、弱い者も、下手な作家も決して悲観すべきではない。しかし、いつも番狂わせをあてにするようでは、その道に這入った甲斐がない。矢張り堂々と、ガッシリと、勝つこと、作れることに重点をおいて、前進しなければウソである。

（路郎）

兵庫県　戸倉普天

片見分けまでは欠かさずやって来る
いつの間にか書記長眼鏡を使いかけ

豊中市　戸田古方

北斉が出て来るような雪が飛ぶ
ワンタン屋と並んで歩いている夜霧

尾崎市　水谷鮎美

今年嫁る娘とうれしさの初詣
寒行の月へ響けとよく揃い

大阪市　西尾栞

盃に島の唄あり一人旅
税吏の名死んだ伍長と同じなじ名
萬葉は綺麗に拓いているのなり
あの手この手の甲斐もなく禿げるなり

大阪市　市場没食子

学生募集そろ〳〵松もとれはじめ
恩給で食えずタコ焼はじめたり
三ケ日睡眠剤は忘れられ
パトロンもあと一押しの金につき

横浜市　福田山雨楼

大阪の商魂はげし八重洲口
時代の差子規よりうまいものを食べ

ホノルル市　内藤草一郎

聞く度に芸者誕生日が違い
ハンサムじゃないが生活力に惚れ
年多く見立てりや仲居ぶっと立ち

大阪府　川村好郎

薬売り唄で聞くよな女来ず
○トレルマデカエルナと部長から
生活力だわいや愛だわと姦しい

米子市　三鴨美笑

半分は都会の客が来て滑り
女にはあまくなるのを見て居れず、
甘党は女の方の中に居り

東京都　藤本満年

銀ブラは女優個人として出かけ
流感は柔道五段をねかせたり
外国はあつさり首相辞めており
マレンコフ一段低い棚へ落ち
南向き廊下へ布団敷いて読み

大阪市　正本水客

散髪の鏡へ雪が降って止み
ともかくも生きてる証拠靴がへり
しゃらくさい死んでお詫びをすると云う
ごみ箱へすてられてから桃の花
海苔茶漬みんな静かな顔になり

池田市　黒川紫香

若後家の喪服一番よく似合い
夕焼の村美しく汽車は折れ

大阪市　丸尾潮花

膝に手をおいて今宵も帰さぬ気
たったひとりの女へ浮世ままならず
奥さまと呼ばれて妓はっとする
惚れきってお園のような気にもなり

大阪市　北川春巣

水道の漏りもよう直さぬ亭主
山陰にもと居たと云う酒の量
送別会主賓が下戸で頼りなし

奈良県　尾崎方正

登りつめた椅子雑用が待っている
数の子で一杯出しておっ払う
一里半たっぷり歩く初詣
代筆の字をほめられて困る彼
恋人と合う電柱へ風が鳴り

岡山県　逸見灯竿

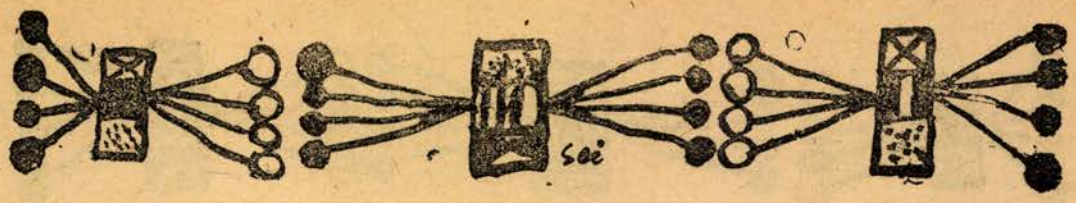
終夜運転ですと娘は遊ぶ気の
ぐっと出せば他社の定期でも通れ
恋人の雄姿眼で追う指定席
朝の喫茶の広さに居た自分
大阪城石のことから先ず話し
奥様の臍くりになる鶏のふん
盗られても知りまへんでと夜警去に

岡山市　大森風来子

魚すきに献立変えるぼたん雪
ぼたん雪末っ子口を開けてたち

大阪市　木下幽玉

痔ぐらいなんじゃと軍隊みたいだね



先に寝とけと云うたが寝てゝ気に入らず
大阪市　水谷竹荘

貫祿が貧乏しているとも見えず
怖い顔してゝも女房に勝てはせず
鳥取市　杉谷湖山

忘れてる妻の鏡も明治型
兵庫県　小西無鬼

婦人会もう野球拳など覚え
早起きの決意炬燵ににぶらされ
尼崎市　小林文月

土曜の夜妻の湯加減きいてやり
大阪市　渡辺孫拙

背のびして兄にまけぬと児がいばり
大阪市　冨岡淡舟

力道山真似る襖のあわれなり
能率的妻で非番も使われる
盲従をしたのに賢妻とは哀れ
奈良県　飯降白香

校長の話先生も生徒もザワ〳〵〳〵
サイン帖書いてもらった字がよめず
奈良県　西辻竹青

おっさんと言われ守衛はそれでよし
批判よしされど己も自己を知れ
宇部市　長野井蛙

口程になく兄んちゃんが伸びちまい
口紅で女と知ったヘップバーン
布施市　森下愛論

元旦はまあ〳〵二日からする禁酒
宝恵籠の白い妓の空虚な眼
真剣な子のいたずらにふと怖れ
お年玉貰えば子供去ぬといい
岡山県　直原七面山

柔道を習う乙女で花も活け
税務署は餅臼までも差押え
老いの身に月の光りは無駄なもの
大阪市　西森花村

胃が悪くないかとラジオに尋ねられ
奉賀帳心臓弱い順に書き
トラックから落ちて大根無事でおり
納税が近づき社名又変り
忘れ物のように一人寝ている昼の風呂
鳥取市　河村日満

妻と来て市場の中も歩かされ
連れ立って出た日を霰までが降り
運のいい日なりつぎ〳〵バスに乗れ
働いてきた手大きく子に見せる
兵庫県　田代尋四

欺されると知らずお茶まで汲んで出し
一泊の旅にも絵葉書送ってき
子沢山せく程子の名呼びちがえ
愛媛県　姫田夕鐘

親分と呑めば満洲が付きまとい
手を握ればガサ〳〵女土方さん
首の宣言へ時計のねじを巻き

首となりぶらり〳〵と出かけたり
東京都　藤本茶々

洋裁へ行かして貰うている二号
漬物の石を新婚貰いに来
私だって働いてるわと坐りかえ
大阪市　谷内一草

片方の手袋だけが又残り
点と線人の思いにつゞくもの
大阪市　福本翩骨

下駄の歯が抜けかゝってる交叉点
大阪市　榎南夏六

もう何にもしまいと思うふところ手
二階から冬をみているふところ手
八頭身親には意味のない背丈
鳥取市　青木遊星

字がまずいので世間に見くびられ
真心が口紅程に赤いなら
岡山県　横部牛歩

求愛を候文で断られ
母親が死んで実家へうとくなり
宿題の此の辺迄は母も出来
岡山市　服部十九平

お遍路の道草遊覧船に乗り
禅もやりダンスもやって世故に長け
左前小型にかえた自家用車
蒸しタオル手だけを拭いた厚化粧
尼崎市　長谷川三司

鮎美

退職の辞令水谷信雄殿
指定席和服で来たを少し悔い
真実の恋に娼婦は死を選び
サルトルを閉じ空腹を意識する
兵庫県　若林草右

特売の客を税吏は見て通り
徴税書炬燵の中で重く読み
ざあますはおじぎで会話ついてゆき
大阪市　足立春雄

お元旦去年のインキ手に残り
子に当る他に策なき妻いとし
嫁ったのは朝からピアノ弾けるから
熊本県　有働芳仙

おふくろと意見が合わぬ育児法
ナポレオンとわざ〳〵書きに来た一票
高知市　大西迷窓

二人目の子が出来値切ること覚え
モデルふと花嫁衣裳つけ淋し
下関市　石川侃流洞

人を焼く煙が地を這うかなしさよ
香具師の手を笑っているのが街育ち
広島県　山田季賛

年度末こゝも工事をする役所
女房の無口へ結局勝てぬなり
課長ひま新聞迄も印を押し
大阪市　山本葉光

急がしいはずの名士が出るゲスト
祝杯のどの顔もみな飲める顔
倉敷市　木村千容

父生きていたらと僕の年をきゝ
年数え背伸び位で間に合わず
もう杖をおつきやすえと京の友
倉敷市　田垣方大

敷かれとる人には見えぬ社の机
恋人の月給だけがまだ聞けず
石川県　那谷光郎

催促を忘れて帰る程酔わせ
もう少し飲めと折詰ひったくり
石川県　野村味平

元将軍一軍を叱咤するごとく
当落はどちらでもよしチンヂャララ
大阪市　木村水堂

母に似て口の達者な子に育ち
宝籤に希望をつなぐ小市民
再出馬汚職の味が忘られず
貫禄がついた心算でいる汚職
演説会よりもパチンコ屋がはやり
政党より夫信じて悉がなく
堺市　八木摩天郎

連休へ俺の当直誰にさそ
倉敷市　水谷谷水

いまはただ選挙マニアで名を残し
県外に囲い実直主義でいる

おしめまでぬすまにやならぬとは哀れ
倉敷市　椙原一善

廃人の良人養う紅をぬる
奥さんがこわいでしように意地になり
岡山県　田村藤波

子沢山から思いつく紙芝居
岡山県　岡田夜潮

用がありや電話をせいと靴を穿き
教室へ立たされたのが出世をし
ランドセル痛々しくも跛なり
岡山県　政田大介

他所の壁だから押ピン遠慮せず
紅つけぬその純情さがお気に召し
岡山県　臼井三林坊

新聞の英語が辞書に見当らず
不義をした叔母を頼った家出の娘
一身上の都合一点張りでゆき
岡山県　岡村牛耕

わるいことばかりはないと酌いでやり
ママさんに名刺とられた慌てよう
上席が席を外せば続き読み
大阪市　稲葉鳩花

酔うているロもゆすいで初詣
盆栽のように初孫あつかわれ
岡山県　本田恵二朗

お見合で東京弁をつかいあい
タチツテト入歯はずせばダヂヅデド

祝言へゴクンと喉が鳴っちまい
恋人としての条件ならそろい
顔なじみ仇名だけしかまだ知らず
大阪市　真鍋一瓢

川風の窓へ呑めない顔を出し
色街を流れて脂臭い河
波白くこゝらで海の名が変り
朝の陽を今せり上げる海の色
ぎこちなく抱かれ笑わされる里子
なれそめもそのたくまない声だった
夢うつゝの仲の二人へ生れた子
袖つめて着る気特価の台に立ち
チャンスまだ至らないのに禿げ始め
京都市　松川杜的

春の旅膝と膝とがすれそうに
まゝごとの児もマイシンの名を覚え
どっこいしょアラ〳〵土筆の上だった
大阪市　永田六龍子

娘夫婦転宅
鬼門もへちまもあるかと若さなり
役得もようせず役所の生字引
豊中市　村上ゆずる

正直で通り阿呆でまた通り
インタビュー手当の安いことにふれ
呼びつけて見たい役所の非能率
鳥取県　北条文郷

我ながら冷き心手紙裂く
大阪市　尾野おさむ

腕組みのまゝ十二月押し通し
反抗が青い焔となって燃え
敗北の涙でそうなふところ手
大阪市　飯島二桂

白マスク外してがっかりさせられる
大阪市　岩島雄歩

風向きが変ったらしい鐘をきく
色気だけ残し誘惑すり抜ける
大阪市　後藤梅志

恩を知る点では犬にさえ劣り
支社長というのへ婦人客しきり
悪酔の背中板場が来てさすり
大阪府　小池しげお

もう妻は肩を叩かすようになり
道が悪うてとあんま少し見え
大工みな二級で酔うた唄になり
五人共みんなよう似た人夫なり
三人が煙草をつけた立話
倉敷市　松村万古

ビールだけ飲んで麦飯遠慮され
道楽を活かして皆に親しまれ
炭俵ぐん〳〵痩せる雪の量
慾の無い顔へ保険屋歯が立たず
倉敷市　藤井[illegible]春日

デパートへ来てインバネス気がひける
後輩へ不甲斐ないけど判をさせ
社長振り見度いものネと膝を貸し
井の中の蛙でもよし貯めている
大阪市　木口賀峰

体力で来る下手くそな碁に勝てず
威勢よい声でガス代取りに来る
風強し逢いに行く嘘考える
岡山県　岡本緑風子

弱い子でほんとに知った親の恩
ことさらに冷たくするも恋心
偉人出たその教室を僕も出た
御曹子父の偉さが邪魔になり
岡山市　津田麦太楼

あっけなく空く進物の一級酒
穢らわしい物に触れたは母の恋
お遍路のおとがい白き笠の紐
ひょろ〳〵と求血ビラに立ち止り
ほつれ毛も見せぬ女で冷たけれ
半分は男湯へ行く子沢山
米子市　小西雄々

見送りが売子は少し邪魔になり
泊り客米の相場も聞いて発ち
平凡な理想で養子喜ばれ
岡山県　浜野奇童

じり貧へ子供の夢が大きすぎ
誤解とは悲し我が子も家を捨て
吹田市　橋本幸男

失恋をして白萩が好きになり

倦怠期猫の欠伸も気に入らず
また次の月賦へはげむ年始め

堺市　高崎雄声

一票を欲しさの嘘に引かゝり
ドライヤーへ放り込んどいて次を結い
いゝ年を取りに港へ急ぐ船

西大寺市　三枝一策

湯豆腐に二級と決めて行く財布
春なれば入園料の要る御室
共産党七味胡椒の役でよし
金利から解いて聞かせて叩き売
空腹へ梅の香りも漂よわず

大阪市　森文夫

早春の洛北を訪ねて

当確の嬉しい顔をまた撮られ
十代で男の慾へ逆らわず

岡山県　岡田青果

恋もせず三十一の処女に春
二号もう切れてよい程溜めて居り

大阪市　吾郷玲人

京　（二句）

録音のように金閣よくしゃべり
ルーブル展聖書も知らぬやつが来る
どうしても借らねばならぬドアー押す
Y談を聞かぬふりしてコンパクト

大阪市　若本多久志

役人に土曜日があり断られ
穏びんに済む始末書へ待たされる

島根県　藤井明朗

笑顔でも今日の笑顔はよそ〳〵し
わたしでも浮気するわと驚かされ
半鐘がジャンとなるのも春のこと
強制じゃーないのでしようと婦人会
残業へ社長も顔を見せに来る
二階借りでも都会なら嫁くと云う

岡山県　永松東岸子

薬石の効なく博士死に給い
おしどりのようだと女やいている

兵庫県　小畠無聖

風邪がうつってもいゝのと唇を向け
二言目には家内がネーという男
待佗びて夫の煙草すってみる
あれぐらい遊んで居って家も建て
外来に街の美点を教えられ
読破したのは一冊もない書棚

倉敷市　野田素身郎

近所とは名のみ隣りの塀囲い

倉敷市　安原斜木

八千円のパイプへ背の瞳がすわれ
故郷の自慢官舎で肉が煮え
もう少し知性のほしい顔が酌ぎ
妾宅の方の和服の裄が合い

大阪市　西川恵風

型の如く仲人中座する見合
失職へ友人一人減り二人減り
おごられる身に好き嫌い言うとれず
書留で約束したのに待ち呆け

倉敷市　矢吹日出雄

父死す

かたくなゝ父だが今日からもう居らず
笑わしておけと貧にも負けず生き
末っ子に嫌いな兄が二三人
もし勝っていたらと思うこの義足
責任は少うし逃げて置く次男

大阪市　清水望峰

同舟近詠

まだ広い日本ラジオのたずね人
洋裁の先生いつか女性めき
ロータリー議題もなくてゴルフ行き
新任の妬く奥さんがもうばれる
まだ職がないまゝ成人祝われる
寝煙草がせめて驕りの日曜日

松山市　前田伍健

長野県　高峰柳児

人間横丁 ㉔

許昌の腕

――わが分身の十周忌に――

東野大八

某日仕事で県立身体傷害者補助器製作所を訪ねた。責任者のK氏と私は、個人的にごくじっ懇の間柄なので、仕事はすぐに片づいたが、終って後の茶のみ話に、貴方は、義手をどうしてつけんのですか、とK氏が、私の空っぽの片袖を眺めてけゞんそうにいう。

「あるのはあるんだが、使う気になる代物じゃないよ」と私は答えた。終戦二年目に東京の国立病院で貰ったものだが、厚手のゼラルミン作りのためつけると、漬物石でもブラ下げているようで肩の凝ること話にならない。二の腕のふくらみ、利き腕の曲線など、一寸見には一かどだが、関節には旋盤用機械の歯車みたいのがついていて、曲げるとギリギリと水車小屋みたいな音がする。厭なことである、と土蔵の二階にほうりあげたまゝ…この話にK氏は黙って隣室に入りまずは御覧下さい、と得意の顔で私の前に一本の義手を置いた。成程、私の持っている金物屋の店先からきたようなのと、見た目からしてモノがちがう。全体セピア色の皮作りで、まことに軽快でしなやか、手にとって曲げてみても、鹿皮の表皮がかすかにキューときしむだけ。感じ入った私の耳へ終戦この方、この面の技術は急速に発達した、この関節部は…とK氏がやりはじめた。そして最後に「遠慮はいらないから作りなさい、傷い軍人ならタヾです」といった。普通作るなら二万円近くもかゝるという。結局私はつけることに話を決めたが、もっともこの即座の決断は「タヾである」というのが、最も大きな魅力になったこと勿論である。その癖、家に帰ると女房に「腕を作ったよ」と晴々と機嫌よく、ボバイのように残った一本の腕を空間に屈伸してみせたことだった。

義手を作るのには、別製の靴でも作るように型とりがある。この型とりというのは、切断した腕の切株に、石膏帯をベタベタと巻く。その乾いたものをすっぽり抜き、その中へ別の石膏を詰め、それを取出して残った腕の寸法に準じて皮つけを行うというわけだ。他日改めてその工場へ型とりに出かけた私は、石膏だらけの一室の椅子にやがて坐った。早速年配の職人さんが、器用に私の手のない肩先にとりついて仕事をはじめる。

「昔は、手でも足でも補助器には菊のご紋章がつき、大したもんでしたがネ」

とその人は、そんな言葉からいろいろと、話しかけ、負傷、切断の模様などを私にきいた。

さゝにになった鑵詰の蓋みたいな迫撃砲の破片が、左腕の上部のどく柔いところを貫通した。動脈はブチ切れ、骨はぐじゃぐじゃ、処置なきことになって切断ということになったが、その野戦病院は許昌だった。二十年四月三日夜半、私は血なまぐさいその病院の一室の台上に横たえられた。最前線の臨時野病だから、薬品、設備はてんでなってない。白い手術着とは名ばかり、三人の軍医、衛生兵が私の杖頭に立並んだときは、正直なところ散髪屋かすし屋の兄さんぐらいの感じしかうけなかった。権威なきこの白い三人の男たちが、私の片身をはずそうというのだ。男の一人は私の足と腕にバンドをかけながらすし屋のデンでこういった。

「マスイが不足している、そのまゝやるから気合をかけてろ、殺しはせんから心配するな」

今の私ならその乱暴な口上をきいたゞけでも、気が遠くなっただろう、しかし砲煙弾雨の激斗とその後の虚脱に近い肉体的疲労或は、さっぱりこの言葉にも迫力を感じなかった。むしろ臨場に、どうぞ、といった他愛ない謙虚さで打うなずいていた。白刃の林の下、大の字になって〃さあ殺せ〃の一心太助式ヒロイックな気分でもあったろうか。カチカチと光る手術器具のふれ合う音、鼻をつくクレゾォールの臭い。突如一人がムズと私の両足をかゝえこんだ。さあはじまるのだ。人は刃俎たり、われは魚肉たりである。時にトウ歳三十二歳の男は、かくて神?のようにめい目した。人間一生一度ぐらいは、こんなヒドイどたん場の一幕ぐらいにはぶつかるものだ。これで生きれば、百年は請合だろう、てなことを感じたのがこの辺までは極楽だったが、一瞬業苦の悽じい煉獄が殺到した。いまこれを書いているペン先が、その時のことを思うと恐怖にワナワナとうち震えるほどだ。左様何万ボルトの強烈な電光のスパークを、まともに沿びたような衝撃、脳天からまともに重量のある鉄柱で一撃くったような、言語に絶するショック。正直なところ私は、そのときすでに半ば気絶していた。やがて私は、自分の固い寝台の上に寝かされている自分に気がついた。身体が羽根のように軽いが、その身体のシン底がギリギリ鋸にでもかけるように疼痛をくりかえしている。顔をしかめてそこに手をやると、病衣の片袖がぐっしゃりといきなり肩先にきた。あゝ、という心からの嘆息は、しかしどうしたことか安堵に似ていた。

「俺がヘシ折ったお前の骨は、ヤキ鳥屋の串みたいにとがっていたから削ったが、これが一番こたえたらしいな」

とすし屋の白服がいつか傍に立ってこういったが、私は出来るだけそれに太々しく笑ってみせた。そんな話のとき、私の傍らを、二人の男が担架を担って行った。よくみるとその肉塊は人間の足や手であった。つねったら、〃痛い〃といゝそうな毛ズネや、何かをにぎりたそうにしている柔かい手もあった。〃おれの片手もこゝにあるのか〃そう思ったとき、寒い風のようなものが、生々しい肩口から胸底を吹きぬけてきた。運ばれていったその多くの手足は、病院の裏庭のアカシアの大木の下に埋められた。私は歩けるようになると、いつもそのアカシアの下に足を運んだ。寒々とした一本の抗がそこに立っていて、私の眼にいつも何か問いかけるように白々と寂しげだった。

「貴方のように左手が丸っきり無い人がこの間来ましたがね、何んでもその無くした腕には青刺がしてあったそうで、残った方の手は白い親から貰った腕の方、よかたよ、本当に、としみじみといってました」と職人さんは、以上の私の話の後でそうポツリといったきり、不意に無口になっていった。

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔一一一〕
喪服まで借りて來たのにもち直し　（一三夫）

近親の危篤の知らせに年が年であるから多分ダメだろう。とても行くまでは持たないかも知れない。そこまで考えると、もう葬式のことが頭に浮んで来る。身寄りとしては自分が一番近いので、さし詰め喪服の用意をして行こうと、喪服の心配までして夜行で来たのに、病人は持ち直していたと云うのである。二泊三泊しても一向亡くなりそうにもない。死ぬのを待っているわけにもいかないので引揚げて行く。こんな例は世間にいくらもある。皮肉な句である。

〔一一二〕
すゝき原園兒が通る声がする　（方　大）

市とは名ばかり、ところ〴〵にすゝき原がある。そこを抜けて幼稚園へ通う園児の声がガヤ〳〵とするのである。どこの児だか判らないが、張り切った声、甘ッたれた声が交響楽のように聞えて来るのである。作者はその声にいつしか親しみを感ずるようになったのであろう。穿ちはないが何んとなくすが〳〵しい句である。

〔一一三〕
間違いなやと宿題母にさし　（花　村）

母と子の対談——

「コレ、やっといて」と宿題を母の方へ押しやる。

「あんたが学校へ行ってるんじゃアないの」

「そりゃア、そうだけど」

「そうだけど、どうしたの、自分でやらなくッてはいけないわ」

「頼むから、やってよ」

「しょうがないのねえ。では、コレきりですよ」

と母が根負けをして宿題をすることになった。

「間違いなや、間違うと困るから」と云い〳〵自分は漫画の本をのぞいているのである。「間違いなや」がよくきいている。穿ちの句。

〔一一四〕
吉田さん三振しても引っ込まず　（豆　秋）

吉田茂が首相をしていた頃に詠まれた句である。ワンマンだと云って、いくら国民から悪評をされても、幾ら失政を続けようがガンとして首相の座を退りぞこうとしなかったので「三振しても引っ込まず」と痛烈に揶揄したのである。野球語の三振が、その失政振りを巧みに表現しているところがこの句のいのちである。

〔一一五〕
峠茶屋一団去つたごみを掃き　（緑　雨）

今の今まで、団体で来てワア〳〵騒いでいた情景が「一団去ったごみを掃き」の語によってホーフッとして眼に浮かぶではないか。写生句として成功している。

〔一一六〕
讀みながら十代ジャズも聞いて居り　（八ッ茶）

何ごとをするのにも、常に精神を分裂させているのが、アプレのティーンエージャーの特徴であろう。そこをキャッチしたのがこの句であり、そこにこの句の穿ちがある。ジャズのような騒がしい音の中で読み、音の中で眠むることは変態かも知れないが、それが近ごろの十代の現実なのである。

〔一一七〕
名人の踊扇子が槍に見え　（七面山）

黒田節を詠んだのであろう。名人芸と云うものは、扇子が槍に見えるだけではない。あらゆるものを生かす力を持つところに名人の名人たる所以があるのである。この句は単なる名人技の写生句であるが、句に於ける語彙の技巧は扇子が槍に見える以上のものであることを知らねばならない。

〔一一八〕
力つきたように冬の日海へ落ち　（一　夫）

冬の日が急に海へ落ちる姿を「力つきたように」と形容しているが、たしかに、そうした感じがうけとれるところにこの句のよさがある。その点感覚の句は、穿ちの句よりもむずかしいかも知れない。キメがきかぬと全然句にならぬからである。

〔一一九〕
女手の家で汚い硯箱　（京一桜）

女手の家では滅多に筆を使わない。日常筆を持つような仕事をしないので、つい〳〵筆ぶしようでもある。硯箱はあっても、筆らしい筆もない。墨はあっても、ドロ〳〵の墨、それもナナメにちびた墨である。すべてが何んとなく汚ならしい。この句のネライはそこをつかんだのである。地味な句であるが一つの発見には違いない。

〔一二〇〕
前借で来た娘邪慳に父と会い　（白　星）

なんだか暗い小説を読まされるよう句である。前借で来た娘ーとだけで苦しかった過去を思わされるし、今もそこから抜け出ていないことは邪慳に父に会っている点からも

想像されるからである。実の父には違いないが、いまだに娘をあてに金の無心に来たことがうなずけるし、斯うした父と娘は昔も今も絶えないのである。内容がロマンチックなだけに古川柳の匂いが多分にする句である。

〔一二一〕

生きてゆく爲の四三の手を案じ　（没食子）

この句の場合、人生をホントに生きてゆくと云う意味よりも、どうにか生活してゆくと云う意味らしいが、そのどうにか食ってゆくのにも今の世はそうラクではないのである。そこで四三の手を考えると詠んだのである。五目ならべは四三の手でなければ勝てないのであるが、生活をしてゆくのにも、生活にきっと可能な四三の手を考えると云うのである。

〔一二二〕

御苦労なこつちやとスキー見送られ　（修）

この寒いのにと先ず思う。わざ〳〵雪の降るところへ出かけなくてもよかろうにと思う。しかも、自分の背より高い荷厄介なスキーを担げて、混雑する夜汽車に乗らなくてもよかりそうなものだとも思う。「ヤレ〳〵、御苦労なこっちや」と第三者の眼に見送られていると云うのがこの句である。スキーヤーに対する傍観者の心理をハッキリと描いているのが面白い。

〔一二三〕

お喋りが来た来た話題さつと變え　（一善）

「あんた知ってますか」

と、まず一問を投げるのが、お喋べりの戦術かも知れない。

「何をです」

と、ウッカリ応答でもしようものならたまらない。誰やら君、近ごろはチッとも家へ帰らない。そのわけはしか〳〵かよう〳〵と事も詳細に解説をほどこし、だから妻君がどうやらだと、見て来たように喋べりまくるのである。そんな男のやって来る姿が眼に映ったので、今まで話していた話題をサッと変えてしまったと云うのである。どこにでも見かける情景のスケッチで「来た来た」の語が人物を躍動させている。

〔一二四〕

肺活量負けずぎらいが二度も吹き　（さぎす）

病院の廊下や、遊戯場などによく肺活量を調べる機具が置かれてあるが、それを試みている男を詠んだ写生句である。性来負けずぎらいな男が試みたが、他の男ほど上昇しないので、こんな筈はないと、二度も吹いたと云うのである。ホンの一寸した穿ちには違いないが面白いと思う。

〔一二五〕

足らぬとこだけ奥さんが口を入れ　（香林）

それは内助の功であるか、どうかは判らないがいつも夫の無口がたたって、云い足りないのを歯痒ゆくも感じ、つい横から口を入れるのである。しかし、夫はそれをさえぎろうともしない。自分の云いたりないことを知っているからである。奥さんに敷かれてると云う言葉も時には甘受しなければならないが、それも仕方がないとすぐに諦めてしまうのである。世の中には斯うした夫婦生活を続けている者がすくなくないのである。そこをとらえたのがこの句である。

ティールーム

草花の種を

毎年草花の種を蒔く頃となるたびに思っていたことですが、全国の柳友が郷土色をもった草花の種を交換し合って、たれそれさんから貰ったのはどんな花が咲くかとの夢をもちながら水をやり虫をとりなどして季節をたのしむのも親しみを交歓していゝことだろうと思います、特に療養生活をしていられる方々には喜こばれることでしょう。

北海道の鈴蘭といったようなもので風土に添はぬものもありましようが、毎年垣根に咲くコスモスとか朝顔の種などであってもいゝと思います。先ず数年来私の庭の隅に咲きつゞけている朝顔の種を粒ほど同封いたしますから先生宅のお庭へバラッと蒔いておいて見て下さい、どんなのが咲くか咲いてビックリも亦面白いと存じます。

全国の柳友間に草花の種交歓を提唱いたします。（大阪・須崎豆秋）

一寸面白い提案であるが、私のうちの前栽は朝顔が咲くだけの土壌でないのでバラッとまいてもおそらく芽を出してくれまいと思う。それでは折角の好意を無にするので誰れかにもらっていただきたい。今のところ葉蘭と棗の木と名も知らぬ雑木だけの庭である。しかもそれを淋しがっているひまもない忙しさにある。（麻生路郎）

「BK川柳の会」三〇年度の課題と選者

應募規定

★放送日時　毎月第二土曜午前六時四五分〜七時（第二放送）

★應募句數　三句以内

★用紙　官制はがき

★〆切　毎月放送日の前月末日着便のこと

★投句先　大阪市東区馬場町大阪中央放送局「BK川柳の会」

★発表作品　入選三句佳作十五句

★賞　入選三名、賞金及び選評プリント、佳作十五名選評プリント

課題並選者

三〇年

四月　「落選」　麻生路郎
五月　「名刺」　岸本水府
六月　「茶碗」　椙元紋太
以下題未定

（三十一年）

七月、十月　一月　麻生路郎
八月十一月　二月　岸本水府
九月十二月　三月　椙元紋太

アサヒビールは
あなたのビールです
朝日麦酒株式会社

川柳第二教室

自然と人生（研究題「陽氣」）

戸田古方

〃いい陽気ですなと背を流し合い〃　修

「柳樽」調の古川柳を読んでいるような句、全く陽気という言葉は気候天象から来ているのですから、俳句の季題のような扱いをしても不思議ではありません。しかし川柳は人間詩であり、人間の臭いがプン〳〵しています。

〃老いらくの恋も陽気のせいにする〃　一太

〃陽気な歌の谷間から湧くハイキング〃　翠峯

〃隠居所に孫が来ている春の午後〃　柳隻

〃世の中のすべてを陽気にしたきもの〃　定次

〃制帽の徽章は陽気な春にする〃　翠露

〃気狂めく陽気に宝掴る話〃正斗

〃病人はかげろうから陽気見つけたり〃　笑雷

〃一生の得一合で陽気なり〃越鳥

翠峯さんの「ハイキング」は四呂平さんの「氷上の輪舞十代の花が咲き」と〻もに思うこと少き若き日のよろこびが自然にとけこんでいるようです。

翠露さんの「制帽の徽章」かつてハンティングしかかぶれなかった浪人の経験をもつ私自身にはいたい程こたえます。三十年前にはノーキャップの新入生なんていませんでしたから。

笑雷さんの「かげろう」の句は一太さんの「病院の窓陽気なり彼女来る」よりも生々(いきいき)として、斗病のつれ〴〵もわびしさも感じられて、陽気なるかな、陽気なるかなと思わせます。

越鳥さんの「一合」は自然の陽気をあらわにあらわしてはありませんが、これはどうしても春ですし、春そのものズバリと動きません。

静かな「隠居所」があるかと思うと「老いらくの恋」があり、自然に負けない色とりどりの「きもの」のあざやかさも春です。正斗さんはとうとう狂い陽気か、人間の狂いか「宝掴り」までもって来てしまいました。

春は人の魂をもうつろにするのでしょう

〃陽気にと落語の中の抜けた奴〃　保夫

〃おさんどん彼女の電話でめしがこげ〃四呂平

〃帰りみちなる程僕はおひとよし〃　修

〃遺失物陽気加減に恐れ入り〃　道也

〃口止めのことを忘れている陽気〃　春也

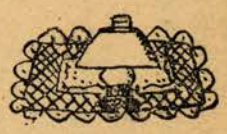
ノンキなりやこそ陽気であり、陽気なりやこそノンキなのでしょう。

「おさんどん」と「彼女」とは同じ人です。この使い方は音字の関係で「おさんどんの電話でめしがこげ」では句にはならないので困ったあげく、ひょいと「彼女」という字が入ったのかもしれませんが、この「彼女」はよく利いています。推敲に推敲を重ねているうちに動かない言葉が飛び出して来たのですが、これこそ詩の神の恩寵とでもいうべきでしょう。

こんなたのしい春をたのしめない哀しい人達も世の中におります。

〃桜にも陽気になれぬ資金繰り〃　四呂平

〃ふところへ頓着なしに来る陽気〃　翠露



中國人と日本人

ホノルル市　白砂旋風

風俗習慣を異にする異民族でありましても、同種同文の国語を使用して居ります事は、切っても切れぬ男と女の腐れ縁の如く、離れようとしても離れられぬ宿命的な連鎖によって堅く結びつけられたものであります。

その好例としては米国と英国があり、更に日本と中国があり、而してスペインとブラジル等があります。凡そ世の中で興味的であり而して皮肉と面白い対照があるかと申しますと、それは小さい島国に住み、自給自足が出来ないが為に、輸入超過国として経済的に苦しみ乍らも、名誉ある貴族の国としての格式と体面を維持せんが為に、日夜苦悩しつゝある英国人と、太平原涯しなく続く大陸に住み、無尽蔵の天然資源と、機械文明の極度に発達して全世界の富の過半数を独占しておる米国人との皮肉な対照であり又同じように狭い島国に住み、貧乏と人口過剰に苦しみながらもすばらしい科学工業力を持って、躍進しつゝある日本と、広大なアジア大陸に住み天然資源豊富なれども、其の開発能力を有しないが故に、今尚文化的に後進国である中国との、興味的な対照であります。環境は人を創ると申します様に、神経質と小心で抱擁力がなく而して気が短くて癇癪持ちで其れに宣伝と外交の一番下手な日本人と、悠々として急かず、鳴かざれば鳴くまで待とうと云う心構えと、遠親近攻と云うような外交手腕と、白髪三千丈式な華々しい、宣伝の名手である中国人とは、其の民族的性格に於て、彼我全く相容れないのであります。此のような性格上の相違は、過去に於て此の両民族はしば〳〵感情的に衝突して、相争いましたにもかゝわらず、究極に於ては、共存共栄の大精神と、国策に依って尚一層堅く結ばれなくてはならないように、運命づけられて居ります事は単に両国の地理的関係或は同じアジヤ民族であるという問題のみでなく、此の両民族は相互的に同種同文の国語を使用して居る事によって、其の文字の持つ歴史性と伝統性は、それが遠く

〃陽気なふりして手形に四苦八苦〃　正斗
〃ピエロの陽気春の気配なし〃正斗
〃陽気やおまへんとチンドンヤちよけてみせ〃　雄声
〃陽気とは別な顔をもつており〃　雪山
　飴ん坊の名句に〃おどってるおどってるふところはからっぽ〃というのがありますので、どれも見劣りするようです。だが川柳人はどの句に於ても苦しさを客観しておられるのがありがたいですね。

× × ×

　本月から雑吟をお願いしましたところ多数投句下さいました。うちの二、三をならべてみて、気のついたことを述べることにします。
〃将軍も人間泥をなすり合い〃修
〃特賞の自転車借りて乗ってみる〃　北柳
〃腹もたち腹もすいてる倦怠期〃　道也
〃整うた小柄で女房よい女房〃　柳隻
〃あったりまえのことが珍らしがられる世〃　春也
〃シグナルがこわい顔して赤く照り〃　幸
〃ふんばって女車掌が釣をくれ〃　幸
〃奥さんの愚痴を手提もきいてりや〃　五茶
〃万歳と死んだ奴はいゝ奴だった〃　雪山
　春也さんの「あったりまえのこと」は川柳らしい見方をとらえられるのは大へん結構ですが、具体的のことでこれがいえたらなあと思います。
　五茶さんの「奥さんの愚痴」を「手提」という小道具でうけ止めていられるあつかい方は前回「ズバリの句について」申したことの一例ですが、はたして「愚痴」と「手提」の間に必然的な、これでなければどうしてもいけないという関係があるかどうか研究の余地があるようです。要するに動かないきめ手をつかむことが大切です。
　修さんの「将軍も人間」の句は別にハガキを一枚いたゞいて、この句とゝもに三句同想の句がかゝれ、例の辻、川口両参謀の泥棒部隊云々の記事の読後感として作句したことが述べられてありました。修さんは辻、川口両氏の泥仕合に強いいきどおりを感じていられながら、どうも、句の上ではそれが出ていないようです。「将軍も人間」ということばの中には辻、川口をあわれむ心が出ていて、いきどおりは裏がえっています。
　雪山さんの「万歳と死んだ奴」はそれら将軍の小さな犠牲の一つでしょう、しかし今は亡き戦友の思い出がしみ出ています。
　「腹もたち、腹もすいてる倦怠期」と「整うた小柄で女房よい女房」、「腹」と「女房」のくり返しもよく似ています。家庭生活の照る日、曇る日でしょうか、ふるくともふるくとも女房は女房なり、とでもいゝたいですね。
　幸さんの二句「こわい顔」で「シグナル」を、「ふんばって」とバスガールの一姿態をとらえたのはみつけどころです。誇張の句として上々でしょう。
　北柳さんの「特賞の自転車」は雑吟の中に入れてみて、「陽気」の佳句であることを発見しました自分の特賞でないところがいっそうぴたりときています。

研究題「口紅」及雑吟
発表　六月号予定
〆切　四月十五日
投句先　豊中市本町三丁目二〇一番地
戸田古万宛

深く遡る程、遂には一本筋の本道に達して一体となるからでありましょう。今日米国と英国との不可缺的関係も亦同じようなことが言い得るのであります。
　抑々英国人と中国人とは其の民族的性格に於て、彼等は先天的に川柳人としての素質を多分に具備した大民族であります。英国人はユーモアの名人として人を笑わせて自分の味方とし、又政治と座談の天才として其の老練と非凡なる政治的手腕を揮って、全世界の隅々にまで彼等の欲する領土を彼等の欲する条件を以て、一滴の血をも流さずして此れを殖民地として奪取し日の没することなしと豪語する大英帝国を築き上げたのであります。
　次に中国人は過去何千年という長い間内乱と革命の連続に悲惨の限りを尽した民族であります。従って中国人一般大衆の頭脳に潜在意識として、強く刻み込まれて居ることは、何人が政権を握ってどのような政治を行おうと余り期待もして居らず、又比較的無関心なのであります。何故に彼等をそうさせたか、その罪は過去幾千年と云う長年月に亘り、搾取以外には何物もなく、実に各々の個人権は勿論のこと、彼等の生命財産の保証すらないと云う、非道悪政の下では国権に頼れず、我が権益は結局自分自身の手にて守護せねばならないという、此の自己防衛精神は、軈て自然的に自己を中心とする、欧米の個人主義思想に類似した物の考え方をさせるようにしたのであります。随って中国人は強力なる国権を背景とする国家主義政治下に於ける、秩序と平和と更に特殊なる、家族制度の下で育くまれた日本人と比較しますと著しく個人主義的であります。此の様な社会状勢と環境下で、中国人が学び得た人生観は、旺盛なる物質慾と逼しい生活力と不幸即ち幸福なり、又悲劇と喜劇とは脊中合せというような人生を悟り切った川柳味の横溢する楽天家の心境であります。本題の主人公陳さんも、此の川柳味を全身に漲らした、中国人を代表する一人としてこゝに紹介するのであります。
　ハワイ砂糖建設王国のため、日本人及び中国人が続々として渡来、ハワイ移民の第一頁を華々しく飾り立てました。当時の彼等の日常生活は、矛盾と特異極まるものでありました。それは彼等が民主主義アメリカ星条旗下に保護されて居るにもかゝわらず、彼等は各々其の激しい民族意識に燃えて、祖国の伝統と風俗習慣を其の儘持ち続けた。それは祖国の延長でありました。此の話は其の頃の事であります。約、半年前遥々日本より来布した某技師吉田さん（仮名）は近頃だん〳〵と顔見知りの友人が出来て、大変喜んで居りましたが、或日の事此れも亦顔

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

昔なら二三軒建つ間借代　大阪府　早川　野甫
伝手の伝手定期三枚いる職場　同　同
借金に行く人もいる日航機　同　同
半生はゴムで消したいことばかり　同　同
質屋を出れば今日は満月　同　同
排菌は止んだと前置して口説き　貝塚市　鈴木　鈴彦
既製品の君の思想に一寸触れ　同　同
窓あけて大気療法をば信じ　同　同
春は来ぬ観光船の汽笛より　同　同
子沢山母へ按摩の手が余り　同　同
お隣りの咳に付合うように咳き　貝塚市　宮本　甲馬
面会の胸がまぶしい模様編　同　同
融通の効く看護婦が碁を覗き　同　同
離婚するように附添さんを変え　同　同
トンプクを頼む看護婦さんを撰り　同　迫田美婦適
ネオンの灯キョロ〳〵駅を押し出され　玉野市　同　同
味聞いている間に甘酒底を見せ　同　同
予備隊でいゝさと就職あきらめる　同　同
手枕のまゝアドバルンと睨めっこ　同　同
ご自慢のライター煙草の量が殖え　呉市　同　余頃　紅児
大根も寒いか軒でえびにそり　同　同　同
禿げ振りを言うて五十の同窓会　同　同　同
デフレ〳〵ポートワインも買い渋り　同　同　同
トラックがあり別荘があ。借金もある　同　同　同
アドバルンお前はいいなのん〳〵と　大阪市　同　増本　翠露
同権々々スキー帽だけちがい　同　同　同
式日のきまってからの美しさ　同　同　同
気はつけど足らぬポケットマネーなり　同　同　同
自家用車土は踏まない靴でよし　和歌山市　同　秋月　宏方
ヘップバーン次男の嫁だから許し　同　同　同
波の音海もなか〳〵音楽家　同　同　同
子供からミキサー買ったこゝも知れ　同　同　同
人形のどれも見飽きた顔ばかり　大阪市　同　板東千代美
師匠にもあいて芸妓に出とうなり　同　同　同
真実をかくし切れないのを恐れ　同　同　同
三味線に置けば小唄の恋になり　同　同　同
指切りをして来た指で帯を解き　大阪府　同　石川ひさみ
肩書が仲居ごときにあなどられ　同　同　同
三味もてば虫も殺さぬ声も出し　同　同　同
見送って私ひとりの酒になり　郡山市　同　同
何喰わぬ顔は耳うちされてから　同　同　藤田　凡々
絶交をポスト意外な音でうけ　同　同　同
とぼけ顔気に入られたか嫁に行き　同　同　同
抵抗を見せてするめが丸く焼け　同　同　同
婦唱夫随スムースにすんだ大掃除　福岡市　同　岩田十三楼
レクレーションやあ〳〵やあと春の顔　同　同　同

馴染の陳さんと、街上でバッタリと出合いました。すると陳さんは、中国人特有の華々しい社交戦を展開し滔々と立板に水式のお喋りを始めましたが其のお喋りの途中陳さん一入声をはずませながら、彼は豪華な御馳走をして吉田さんを招待する事を発表致しました。而して愈々其の日が来ましたが、吉田さんは全く迷って仕舞いました。それは陳さんが云うような、九つの大皿が並ぶ中国料理は大変高価なものであり、第一彼は其の様な御馳走に預るような、懇意な間柄では決してないと云う事と、その第二は、此のような場合日本人の礼儀作法として、人から親切に招待を受けながら、缺席すると云う事は先方様に対して、大変失礼に当ると云う事で、人の良い吉田さんは散々苦しんだ揚句、それでは御言葉に甘え、出席する事に決心がつきましたが、然し待て待てと吉田さんは又考えました。それはいやしくも神国大日本帝国を代表する一人として、日本男児の体面にかゝわる問題だから、食事直前を窺って訪問すべきではない、食いたくて生唾がにじみ出るような御馳走でも、武士は食わねど高揚子ということがあると、彼は威張ってみました。そこで食事前約一時間のところが丁度よかろうと、胸算用しながら、幸い陳さんの家はあまり遠くないので、ぶらり〳〵歩き乍ら行こうと

大学卒其履歴書の字に呆れ　同
これはこれ大和撫子レスリング　同
母さんが来て初産はほっとする　米子市　勝田　正郎
更生をすると確信する弁護　同
子の貯金しかと鞄に入れてやり　同
値切らずに買って心のゆたかな日　同
親類の子が出来るので母躍起　大和高田市　戸田　悦子
短大出だから安定所も困り　同
紛装のままでクイズへ来るゲスト　同
その昔通りに仕込みたい苦労　同
大臣になったとたんに野暮を云い　奈良縣　麻生アート
三十路いまりアルの壁につきあたり　同
この髭も生活力の顕現さ　同
高架線民のかまどをみてはしり　同
胴ぶるいしながら酎の酔をまち　愛媛縣　村上　旭童
酎一合かけた将棋をとり囲み　同
置物も大黒様という家風　同
ランドセル父母の期待にもうそ　兵庫縣　吉原　紅月
安静を恋のドラマがちと乱し　同
安静時金魚もひれを動かさず　同
花鋏の非情がつくる造型美　大阪市　藤村　梨花
日だまりへ花売り春を持って来る　同
昼の月に似た愛情のうら淋し　同
黙々と蔭の力で満足し　岡山縣　大町　別城
おしっこは出来ぬが化粧は一人する　同
先輩も負けて嬉しい記録が出　同
頭では他人に負けない気の無口　大阪市　金井　文秋

読んでほしい本に眼鏡を子が探し　同
役不足学芸会の事にさえ　同
満場一致手分けでのむ仕度　愛知縣　岩川　寛虚
児を貰う話も真顔不惑過ぎ　同
顔ぶれは変らず棄権するときめ　同
五百円のカメラの前に立たされる　大阪市　不二田三夫
油差しのようにペコンペコンと金を出し　同
心眼をひらいてパチンコ止めと言う　同
散髪をして頭から風邪を引き　岡山市　宗高八ッ茶
候補者は腹を切ることまで誓い　同
落ちぶれて運がすべてのように言い　同
成層圏の様な理想で嫁きおくれ　美濃市　安平次弘道
恋人が出来てペン習字を始め　同
子沢山私は自然に逆らわず　同
買わぬ気のデパート七階まで昇り　滋賀縣　土守トン坊
新婚の二人を泊めた金屏風　同

推薦候補落選す

勝闘を憎々しげに見て戻り　同
給仕から秘書へ美人の早いこと　米子市　松本　舎人
腹すいた声も嬉しい全快日　同
綱棚へ二人で上げて旅楽し　同
台所亭主いきなり頭打ち　兵庫縣　酒井ひか平
倦怠期せめて唐辛子利かしとき　同
頼りない躾娘は舌を出し　同
恰好は和製少しも負けて居ず　今治市　長野　文庫
党籍を変えて利権を追い廻し　同
よく聴けば政見ならず現想論　同

出掛けました。南国特有の碧い空に碧い海それが遠く延び切って、遥か水平線の彼方で一色に融け合ている。真ッ赤に咲いたハイビスカの花と椰子の葉蔭を縫ってそよそよと吹く貿易風に乗って、黄色に熟し切ったバナナとパインアップルとマンゴの実がブン〳〵と強く鼻を衝いて来て食慾をそゝる、まるで夢の国だ。吉田さんはそう呟くと彼の足さばきは、軽々とまるで踊って居る様だ。間もなく陳さんの家のベランダに立った。吉田さんは静かに呼鈴を押すと、陳さん夫妻が出て、来て彼を広い応接間に通しました。その陳夫妻の愛嬌のよい事は溢れる様な笑を満面に湛え乍ら、応待して呉れます。春風駘蕩とは、実に甘い事を云ったものだと、彼はつくづく感心しました。

而して中国の鮮かな外交振りは到底日本人など、其の比ではない事を悟りました。

吉田さんは応接間の大きな安楽椅子にドッカリと腰を下しますと、間もなく香の非常に良い中国茶と、西瓜の種を盛った小皿を吉田さんの前に置くと、陳さん夫妻はニコ〳〵顔で奥の一間に引き退りました。西瓜の種の食べ方を知らない彼はそれには全然手もつけず、ブウーンと、濃厚な香りのする、中国茶をゴブリと一口飲み込むと、壁に掲げてある中国の風景画の額を眺め乍ら、彼はとりとめ

平凡な女に返る髪の型　西宮市　東浜　成詩
石女の洞ろに響く塵はたき　同　同
処女ですと平気で言える赤い爪　同　原　章坊
立錐の余地へ女を割り込ませ　出雲市　同　同
プラトニックラヴ笑われるような寒の月　同　小林　夢介
どうしても早起き出来ぬ二食主義　同　同
童心を培うように紙芝居　岡山縣　同　同
最う顔が先へ返事をした見合　福岡市　永吉　喜好
メートルの家では暗い夜を更かし　同　同
百円の御祈禱榊振っただけ　同　同
ご自慢の犬が塵箱あさりはり　島根縣　景山　綾美
心中を言い出したのが生き返えり　同　同
公約を果す気持は軍備だけ　同　同
水車小屋ここにも春の音がする　同　久家代仕男
上役の助言が邪魔な昼休み　平田市　同
お富さん掛けてパチンコ焦立たせ　同　梶川　蘇堂
行商が格子へ惑う稽古三味　同　同
終電へ酒のピッチが早うなり　秋田市　土井　京子
かき舟を出てから夫婦無口なり　同　同
鳶の舞う真下で壁をこねさされ　同　菱田　満秋
春霞機関士キッと顎の紐　和歌山縣　同　同
日曜は父の料理で派手になり　同　米沢　暁明
お見合は着物も頭も母の趣味　同　同
ボロ家に世界一よい父と母　同　同
税務署が来たので高利貸かえり　天理市　同　同
墜ちるだけ墜ちて綺麗な服を着る　同　同　同
口紅を気にしてキッス断わられ　同　同　同
留守居する時は兄弟仲がよし　愛媛縣　同　同

消印は熱海日光便り来る　同　藤井　千年
下駄二足きっちりとあり新家庭　同　同
ルーヴルより生きたヴィーナス見て帰り　天理市　同　同
好きな人が出来たと母に寝て話し　同　同
人様の毛絲と知らず猫はじゃれ　同　高島　玉兎
乗替えてバス女房の訛なり　廣島縣　同　同
民主政治デフレ端ばしまで届き　同　同　同
共稼ぎ街の家具屋に夢があり　同　同　同
うぐいすが火鉢の俺に春を告げ　倉敷市　同　野田　一念
唇の段階らしい姉の恋　同　同　同
学校も金もて来いと言うところ　同　同　同

養老院惨禍

天国へ百の命のひしめく夜　大阪市　武部　若菜
乱闘をやらない顔を選りわけて　同　同
玄関に若さこぼれてハイヒール　同　同
女子病舎の方から朝がやって来る　兵庫縣　高見　薫
常識と云う英語をきかされる　同　同
スランプの訳は成程云えぬ訳　同　同
二次会を抜けて来たんだ恩にきせ　大阪市　三好　澄泉
よう来たよう来た靴のままの孫を抱き　同　同
アドルムをのんで秒針冴えた音　同　同
コルペンで沸かす夜更けの合成酒　高知市　岡本　元馬
春雨もニコヨンの身で腹が立ち　同　同
子等不在コンニャクで食う老夫婦　同　同
国破れ山河は基地に埋められ　出雲市　佐藤　泰之
国会も雛壇飾る春が来た　同　同

長女誕生

鎹でピタリ止った遊び癖　同　同

もない空想に耽って居りました。カチ〳〵と柱時計の刻む音に、フト気付くと彼は大変空腹を感じました。

彼の胃袋は陳さんが盛んに広告をした様な山海の珍味を早く送って来いと催促する。然し不思議なことには、此のような御馳走を料理して居るような、俎板の音は勿論のこと生唾が湧いて来るブンと甘そうな、香りも少しも来ないことであります。それに仮令小宴にしろ親類や友人の一人や二人は招待されて来る筈なのに、猫一疋も来て居ない所を見るとこれは失策した。マンマと陳さんに担がれたなと気付きましたが、そこは、修養の積んだ吉田さん、少しも取り乱さず、静かに椅子から立ち上ると、全身の勇気を揮って奥の一間に向って別れの言葉を述べますと、俄に扉が開いて陳さん夫妻が現われました。其の動作と態度たるや、先刻初めて訪問した時と少しも変らぬ、エビス大黒様のニコ〳〵顔で「もう少し御待ち下さいましたならお食事でも差上げ度いと存じますのに、それは〳〵実に心残りの事で御座います。」それは名優の演技でありました。如何にも残念そうに真に迫る顔の表情は、千両役者の入神技の芸術の極致であり、彼は完全に魅了されて腹も立たない程でありました。そこで吉田さんは一生一代の外交手腕を揮って申しました。

株を買う話聞いてただけの僕　高砂市　藤田　和笛
本読んでいて悪口も聞いて居る　同　山口　富村
頑張ろうとはライバルの年賀状　大阪市　同　持田　勉
子に怖いパパでママには敷かれ居　島根縣　同　多炭　若柳
無記名の調査へキスはしたと記し　貝塚市　同　阿部かつみ
トランペット突然天井向いて吹き　貝塚市　同　平山　港雨
絵のような療舎さんまの煙が満ち　貝塚市　同　柿原おかき
病床で妻へ恋文めくたより　岡山縣　同　国富　直人
新市会みな神妙に標準語　貝塚市　同　有友　玲羊
生活よくするビラまいて首切られ　高知市　同　田淵　正平
病院に居るにうどん屋風邪ぐすり　貝塚市　同　深見　雅堂
船窓へ首が並んだ港の灯　同　小浜　牧人
窓あけて家主眺めも買わせる気　貝塚市　同　本多　省三
耳たぶに香水つける事おぼえ　岡山縣　同　津田　千舟
解消を待ってた様な縁があり　岡山縣　同　中松　一恒
浮動票僅かな義理へ引懸り　同　高田　一夫
汚職してまだ言分の有る候補　高知市　同　池田　古心
退屈がまた繃帯をほどいてみ　同　大塚美能留
これっぽちの客へもお世辞言うデフレ　岡山縣　同　芝原　洋史
方角で断る肚で見合もし　同　野村　初甫
内職は追われ給料は又遅れ　大阪府　同　丹波　太路
残業がパチンコだこをこしらえて　西宮市　同　山本　春也
かけ合いの上手無策を策として　同　佐々部　鐵佐志
公約の甘さでねらう婦人票　同　久保　和友

銀婚

アルバムの二十五年の浮沈み　大阪市　同　片山　鏡水
百株が保守革新と気を使い　同　御戸　凡平
おてもやん訳が分らぬまゝ覚え　貝塚市　同　岡島　孤舟

今掃いた庭へ開店ビラを入れ　同　野口卯之助
恩給の小店お世辞の言えぬ父　石川縣
特売場課長夫人の顔でなし
正月の飯はもったいない白さ　大阪市
清き一票毛沢東と書いてあり
お喋りはよくなってから見舞に来　岡山縣
見物は小火を不平の様に言い
生と云う執着橋の下に住み　岡山縣
雑誌から新婚の夜を教えられ
スクーターで来て百姓妻を踏み　貝塚市
公約のきれいな嘘も聞いて去に
足が出る〳〵と出張ゆきたがり　大阪市
無形文化財ほど大臣続けたし
商機逸せず祇園の夜の酒　大阪市
二度目とは言わず汚点有る鏡掛
結核菌恐れぬ純情さに弱り　倉敷市
私用なら能率ほっといても上り
三月が来てインテリのまた過剰　岡山縣
失業をして見る雪の冷たすぎ
貧乏はこんな程度の金を出し　滋賀縣
尊敬をしてる仇名が気に喰わず
乱れ髪夜叉ともなれず泣いただけ　西宮市
栄転の落着く先は北海道
はなむけに姉へそっくりの手を教え　廣島市
久振り名前忘れたまゝ別れ
歓迎の中に足りない顔があり　大阪府
追羽根の妻に若さがまだのこり
人身売買金の病にとりつかれ　宮崎市

「実は私の親友が、お宅の近所で住んで居りますので彼を訪問した帰り途偶然にもお宅の前を通りましたので、貴君に敬意を表したいと存じまして立寄った次第で御座ました。これは大変お邪魔を致しました。いずれ改めてお目にかゝりましょう、ではこれで失礼致します。」と吉田さんは頭を二三度下げながらペコ〳〵の空腹を抱えて陳さんの家を辞しました。そして彼は、帰宅するや早々に、グウンと鳴る胃袋にお茶漬を四五杯続けさまにかき込んだのでありました。

後日吉田さんはこの赤毛布話を、彼の懇意にして居た蔣さんと云うインテリの実業家に耻を忍んで話しますと、蔣さんが先ず最初訊ねましたのは「吉田さんそれは大変御気の毒な事でありましたが、その陳さんとか云う人が招待して呉れたと云われましたが、それは中国人が伝統的な習慣として、人を正式に招待する時に使用する、葉書型の赤紙を二枚綴りとしたものに、印刷した招待状でしたか」と申しますので、吉田さんは「いゝえ、陳さんとは偶然にも街上で、バッタリと出遭いまして久し振りに長々と話をしましたが、そのお喋の最中でありましたから勿論口頭を以て招待して呉れました」と返事致しますと吉田さんがまだ〳〵云い終らないのに、蔣さんは大きな太鼓腹を揺ってウ

抜いて見たからとて白髪減りはせず　同

新薬と看護婦までが恩に被せ　鳥取市　北村　三歩

発展の基礎駅が出来バスもつき　同

処女と言う魅力クルスが胸に揺れ　玉野市　星川　陽石

誘われるまゝ春雨へ呑みに行き　同

嫁ぐ娘へ母が淋しい借り衣裳　山口縣　岡本　鳥石

女中部屋行李をあけて淋しがり　同

恋人が欲しいと思う程に癒え　大阪市　安井　久子

ふたありで歩けば星もシャンデリヤ　同

回診の日だけに破るカレンダー　貝塚市　護川　稍月

梅林へ一曲弾き度い風情なり　同

安静へうれしい便りが邪魔に来る　貝塚市　伊藤　笑朗

残り福などと長女を貰わされ　同

ストーブへ椅子を取られた女事務　兵庫縣　前川左文字

引っかけた下駄が大気を吸いに出る　同

もうかりまっかと言ってるやつがもうけて居　大阪市　西岡　洛酔

失業と云わせぬ退職金の高　同

一度した旅を夫婦でなつかしむ　松江市　橋本白郷子

夜間部に通うマフラー無理をする　同

友情のバラの白さに足りて寝る　米子市　須藤　鉄平

よく笑う明るい貧のしじみ汁　同

酒の害説いてもぐ〳〵飴をかみ　松阪市　萬濃　修

浮ぶ瀬を信じざく〳〵霜を踏む　同

社長等の飲んで成り立つことばかり　倉吉市　横山　生二

愛すれば嫉妬は湧くもの爪を噛み　同

朝立ちの時間は祖父が頼まれる　大阪市　西本　保夫

姉妹のけんかお好み焼のこと　同

甲斐性のない手で実印おして借り　石川縣　石川素百々

気短を晩酌ごとに意見され　同

一票で汚職の罪を裁きたし　荒尾市　福永　凡八

選挙費を減価消却する汚転　同

十円の市電へ夜逃げするような荷　大阪市　有元　文司

フイギュアーに勝つて女を疑われ　同

鷺司栄子嬢へ

剃髪は四年後と聞きほっとする　堺市　小阪慈雨来

鮮かに居留守が云えて妻は老け　同

病床へ生きた魚を見せにゆき　岡山縣　岡崎　俶子

転勤の駅へ邪恋も捨てゝ立ち　同

漢学をよく読む人で山羊と住み　岡山縣　穂北ペン郎

仮定の上の金儲け論聞いて居り　同

今日こそは乾けとおむつ冬日和　廣島縣　山田スミ子

女手がないから嫁をとれと父　同

春はきぬ共に歩かん空財布　大阪市　伊藤　光二

公約は作文として聞き流し　同

死ぬものか病窓を行く雲があり　今治市　越智　義夫

手袋の赤さ少女の夢であり　同

義理だての見合へ足がしびれかけ　岡山縣　坂手　有子

焼芋をかじる心にあるゆとり　同

不景気か棋敵とんと寄りつかず　山口縣　田口　紫陽

嫉妬の目ふせて彼女が祝いに来　同

呶鳴っては見たがその眼に射返され　倉敷市　山田スミ子

繕いの疲れ老眼鏡がずれ　同

ブロを選る親子へ二台要るラヂオ　兵庫縣　出口白猫児

バイクから単車へ家運向き始め　同

化粧なぞ覚え白痴にひそむもの　松江市　舟木与根一

偽軸へ作法通りに手をついて　同

ワッハッハと地震の様な唸りを立てゝ笑い初めました。そして笑って笑って心ゆくまで笑ってやっと笑いを押えつけた蔣さんが申しますのに、このように口頭を以て招待された場合には、中国人の伝統的な礼儀作法として、招待されても絶対に行かないし、又招待した側でも絶対に来ないと云う、不文律がありますので懐ろは絶対に傷まないと云う安心感の下に、お互に天下の珍味を並べ立てゝ、招待競争が展開されますのは、如何に中国が華々しい社交好きであるかと云う事を示す一端であります」

とそう云い終ると、蔣さんは俄かに真面目な顔になって「吉田さん、どうです、こんどは貴方が先日の仇討ちに日本料理の粋を集め、たとえばスキ焼鍋に日本の名魚鯛を日本から取り寄せて、片身は刺身に残りは塩焼とし、更に食後のデザウトに、東京製日本一洋羹とその外山ほど並べ立てて、陳さんを招待してはどうですか、然し吉田さん勿論口頭を以て招待するのですよ」と念を押しながらそう云い終ると蔣さんは再び可笑しさに堪えかねて例の太鼓腹に波を立たせながら「ウワッハッハ」と笑い初めました。

三千年の連綿たる歴史を誇る日本民族が、悠久五千年の歴史と伝統を持ち続けた中国に攻め入り此れを征服し得なかったと云う事は、如何に民族の持つ歴史性と伝

不甲斐なく病み続けつゝ口達者　米子市　福代天邪鬼
酒代にマダムの笑顔も含みます　同　藤井　五茶
退院の背広をナースに見直され　倉敷市　同　中田　白李
クラシックへひばりファンのすましよう　同　同　高木　緑葉
オフィスとは違う課長の顔へ酌ぎ　赤穂市　同　久保田青竹
税金も選挙も知らず花が咲き　和歌山縣　同　小田　紫草
公約へ薬の能書思い出し　和歌山縣　同　小田　紫草
豆まきの声てれくさい新世帯　同　同　越智　一水
恋人といるとは知らず渾名呼び　和歌山縣　同　伊吹二三歩
すねている女の術にひっかかり　同　同　森山　荘
背の子の重みが増した帰り道　岡山縣　同　竹原　雲平
くどかれた頃の日記のなつかしく　同　同　橋本みどり
旧正へ肉も映画も割引し　今治市　同　西田　幸
お遍路の鈴の音菜の花越しでよし　岡山縣　同　梶尾　節子
魚屋に叱られて買う新鮮さ　岡山縣　同　岡　一門
円と弗程背も違う並木道　出雲市　同　小野花団子
女の子に首を抱かれて歯が落ちた　出雲市　同　富池　茂人
こゝろの隅に悪魔が住むネオン　同　同　谷　一平
しこりまだ残して和解の手を握り　出雲市　同　竹松　九角
あかんべが出来てしっこはまだ言えず　大阪市　同　石田　土龍
旅情寂し夜汽車で聞いた除夜の鐘　大阪市　同　安永　理石
凝視した一点蟻が這うていた　同　同　狩原　竹郎
アベックは女の好きな物を食い　神戸市　同　清原　理川
チャルメラとうちわ大鼓がすれちがい　同　同　小田　柳叟
まつげ迄邪恋に狂う艶を出し　岡山縣　同　小島さぎす
噂から五年二人の母であり　同　同　安永芙美子
斗病記他人ばら〳〵くっただけ　岡山縣　同　渡辺伊津志
人形のように植毛隆鼻術　同　同　山崎　北柳

ビタミンは蜜柑二つで済ましとき　岡山縣　同　甲斐　道也
お隣も欠伸している二本立　同　同　淵川　秀敏
銀行の賀状へそくりバラしに来　岡山縣　同　星野　侑正
三の糸少し妬いてるなと思い　同　同　西山　晴々
失業してるのに女房又孕み　大阪市　同　南部ひでを
台所女房の色に染め出され　同　同　太田　木声
公約は能書ほどに効きもせず　岡山縣　同　石井　菊母
労働者なみの特配受けて病み　同　同　三宅　年枝
急救車今日は我が身が乗ろうとは　京都市　同　松永　恒青
手古摺った挙句持込む修繕屋　熊本縣　同　谷野　泰平
双従兄選挙が済めばもう他人　熊本市　同　
去る者は追わず三号出来かゝり　群馬縣　同　
ピンカール寝るまで女やゝこしい　同　同　
一票で汚職の議員葬る気　貝塚市　同　
恋人をうつすカメラをうけにゆき　貝塚市　同　
姉と言う名のロボットで病みつけ　貝塚市　同　
整形をしようかと顔へ聞いて見る　鈴鹿市　同　
特賞の自転車借りて乗ってみる　石川縣　同　
二枚舌フルに廻して票に媚び　守口市　同　
整形科退院をしたコンパクト　熊本縣　同　
公約は選挙が終るまでのもの　鳥取縣　同　
口ほどにない先輩に導びかれ　岡山縣　同　
小慾がだん〳〵庭の木をふやし　玉野市　同　
暗い路たこ焼食ってる人に会い　池田市　同　
もの真似の予選へ女派手に着て　大阪市　同　
体験を生かすに歳をとりすぎる　大阪市　同　
迷信は信じないだが豆をまき　金澤市　同　
月給をはたいた山の寒い事　大阪市　同　

統性の強靱さということを如実に証明するものでありましょう。日本今日の不幸は此の重大真理の探究を怠った事に原因を発するのであります。

然るに賢明なるアメリカ人は此の重大真理の探究にピッチを上げて精進して居ります。即ち今や敗戦国日本の古典文化は戦勝国アメリカのあらゆる分野に於て、真剣に研究されて居ります。そこにアメリカの偉大さと輝かしい、明日の希望が約束されて居るのであります。明日の新しい文化を創造する為には、過去より現在に至るまでの一貫した緊りが其の基礎をなすものであり、それ故に歴史と伝統は貴重であり、又尊いのであります。

我が歴史と伝統は、これを尊重して飽く迄これを持ち続けて新しい明日を建設する事は、一運命的

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識！
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！
明色アストリンゼン
桃谷順天館

乞食の瞳少し動いたハイヒール　西大寺市
当選はしたが特票気に入らず　倉敷市
見渡している間に恋はみんな逃げ　貝塚市
初孫にサヨナラさせて乗り遅れ　宇治市
人妻となって変った御挨拶　岡山縣
兄の方が負けてやる事覚えて来　河内長野市
闘病の床から小言飛んで来る　岡山縣
御値段の事から妻のきく土産　倉敷市
待ちぼうけらしい煙草のふかし　大阪市
トラックの方があわてる三輪車　岡山縣
御近所の指図通りに棺を出し　岡山縣
新学期踏切越えるまで送り　天理市
緋のはかまなびかせパーマの巫女の舞　神戸市
花たばは赤子の様にだかれてる　天理市
ライバルと入試に落ちてから握手　岡山縣
文句だけ聞かされ寄附はことわられ　岡山縣
選挙権出来て元服した気持　歌和山縣
ひやかされた時代懐かし倦怠期　西宮市
総選挙公約だけは豪華版　和歌山縣
病み上り妻のうれしい肩をかり　和歌山縣
空腹を知らぬ病の不倖　西宮市
双の手に春のいぶきを握りしめ　西宮市
貧乏のくせに民主党が好き　和歌山縣
重役のゴルフキャデーに追つけず　倉敷市
選挙権できて社説も読み始め　和歌山縣
鼓うつ程のよめごじゃ又困り　唐島縣
百万弗の足は正座をせず坐り　大阪市
次々とヒットを放つ選挙前　堺市

寺尾　一臍
岡野風の子　河楊　梵鐘
柿本　古竹
吉田　清遊
森本黒天子
田淵　笑鬼
佐藤千代春
児島与呂志
石原　文郎
菅田　真
阪本　貴通
仲どんたく
仲野　光子
宗森とも子
池田　文女
松本　溪泉
小杉没法子
田中　能子
木下　一休
前里　里奴
中山　桔梗
那須虎児朗
長尾　越鳥
松本　竹外
山田　紫蘭
後藤　志津
辻　圭水

ネクタイの柄まで好きな人がでる　岡山縣
アルバムに妻の了解得て残し　岡山縣
佗しさは寝押ズボンの二本筋　岡山縣
屹度来る予感へはずむコンパクト　岡山縣
ピンボケも愛人なれば大事がり　出水市
ジャズ好きな妻で佃煮食わされる　大阪市
眉植てからの貴男が気をもませ　岡山縣
末の児の手細工も見ゆ雛祭　尼崎市
愛情は義足などには目もくれず　岡山縣
生みたての卵両手にまるめて来　岡山縣
本人に来いと名刺も突返し　尼崎市
沈丁花夜の空気を甘くする　岡山縣
それからの栄養餅ばかり喰い　岡山縣
病室の隣同志が風邪を引き　大阪市
教会を出ればやっぱりシャバの風　大阪市
初出勤日本髪もいる職場　大阪市
かと言うて喰うてばかりもおれぬ下戸　岡山縣
アパートは夫婦喧嘩も小声なり　新居浜市
手袋が世帯やつれの手をかくし　大阪市
転勤へ蕾のままの恋で散り　岡山縣
ほのぼのと手袋温し亡き母の　大阪市
十二月忘れた年令を思い出し　大阪市
看護婦の詰所横目に歩を殺し　岡山縣
趣味のない病床退屈が続き　鳥取市
病ぼこぼこジャズも聞きつゝ食事出来　貝塚市
大阪の灯が美しい終列車　大阪市
出欠を知らす会議はのめる筈　新潟縣
美の祭典焔がゆらぐ聖なる火　大阪市

大石　一久
舞島　白郎
田島　三良
藤田　美雪
川端　柳風
坂田　真一
浜口志賀夫
林　澄子
松島　不在
中屋　すず
川口　秋香
及川　南洋
池戸　桃村
半田　夏生
桝本みのる
中谷ハナ子
清水　秋夫
加藤　向水
右本　一子
藤原　民徳
三宅　孝男
川中　正巳
宮田　竹坊
岩田天保銭
杉本　一鶴
深山沙智子
高野　不二
清水　和夫

なものであります。然し他人の持つ歴史と伝統は、これを研究して理解こそすれ、決してこれを侵害すべきではありません。そこに川柳は川柳の行く道があり俳句は俳句の行く道があるのであります。

菁花さん

酒井ひか平

家沢菁花さんが誌上から名を消されて早や一年有余にもなる。

菁花さんは五十を半ば過ぎる頃から川柳を始められ、還暦近い人であるが、その勉強振りは若い人でも足許にもよれない程の熱心さであった。「川柳雑誌」が来ると、来た日から、次の雑誌が来るまで繰返し〳〵隅から隅まで読んでいられた。だからどんな句がどこにあったかどんな句の類句が過去のどんな号にあったかなど、よく覚えていられた。他人の名句を書き抜かれた句帖だけでも五冊を下るまい。それも古反古の大福帖をたんねんに裏返えし、他人の句といえども、いさゝかの誤字もなく、四角い字で綴られ、それに所感さえも記されて居り、人が尋ねれば立ち処に数年前の句をも引用される記憶力の正確さに到っては一驚の外はなかった。

菁花さんは経済的に恵まれぬ理由で惜しくも会員を退かれ、今は深く田舎に引込んでいられるが、この菁花さんの努力は我々川柳人の大いに学ばねばならぬ処であろうと思う。

板東千代美さんを訪ねて

（女流作家訪問記2）

丸尾潮花

「柳歴は」とお尋ねすると

「七年」とおっしる。

「先生は」とお聞きすると

「石川ひさみさん」とお答えになる。

「お歳はと聞けば二十八」と、はっきりおっしゃる。

「御縁談は」と伺うと

「考えても見ません」と強気に出られる。

「愛人は」と突込むと、フフンと笑いながら瞳を膝の上に落される。板東千代美さんは藤間流の踊手であり、お茶は裏千家、舞踊人形に並んで家元の定文を染め抜いた鏡掛には千代美と白い文字でネームがぬいてある。進められた座蒲団は贔負から贈られたものらしく眼を射る様に華かなものである。

「お風邪気味だそうですね」と言うと

「もういいんですの」と言いながら茶や菓子の用意をされる。

「川雑の二月号を手にされてどうお思いになりました。近作柳樽のトップを切られた御感想は」

「さあただ嬉しくって、母がそばにいてくれましたらお赤飯でもたいてくれますのに、何故もう少し早く川柳を熱心に作って見なかったのかと後悔してますの、此れを機会にもっと〳〵川柳に精進したいと思っていますの」と言いながらニッコリと微笑まれた。

「川雑がお手許に届きますとどなたの句を先ず御覧になられます？」

「そうね」と少し思入れ宜敷、「近作では石川ひさみさん、それに花子さん、梨花さんの句も好きですの、お眼にかかった事はありませんけど何処か私なんかの近寄れない気品って言いますのか強いものを持っていられるのではないかと思われますの、（感情の乱れ系とる指に見せ）女性として細かい鑑賞が見える様に思いますの、それに一月号の（整形手術造花の神をあきれさせ）この句とても好きでした。それに悦子さま、久子様、などと最近女流川柳人がぐん〳〵伸びて来られますことを何よりも喜んでますの、川柳塔では第一番に潮花さんの句を見せて頂きますの、どうしても剛染のある方の句を見る、見なければ居られないと言うのも人情でしょうねえ。今月号の潮花さんの句で（近松の筆は死なねば添えぬ恋）あの句が一番好きでした。女流の方では飯降白香さん、二月号に（夕映へ恋人あるぞと叫びたく）って句が出ていましたわね、私ねえ、白香さんの句を通して白香さんってとても芯のしっかりした方じゃないかと思いますの、それでいて、どっか女性としての悩みを持っていられる様にも思えますのよ、そしてまだ御独身でいらっしゃるのではないかと思いますの（恋人あるぞと叫びたく）とても強気で言っていられる様ですけれどかえって淋しさと弱さが出ていると思いますのよ。私の考え丈けでしょうか、潮花さんそうお思いになりません。」とハッキリおっしゃる。

「千代美さんはどんな句がお好きですか」

「そうね、どっか一寸ばかしセンチな愛情の句ね（琴弾けば琴の調べのなかに君）花子さんのこの句も好きでしたし（影じっと動かぬ夜の淋しけれ）淡舟さんのこの句も好きでした」

「では千代美さんの嫌いな句は？」

「嫌いな句って有りませんけど、強いて嫌いと言いますと、あまり女性を裸にした様なえげつないストリップの様な句が嫌い。何かしら自分自身が恥かしくなるんですもの」

「毎号路郎先生の御執筆になる新川柳鑑賞を読んでいられますか」

「えゝとても参考になるんですもの今月はひさみさんの句が見られましたけど（恋人がいるのに嫁けへんか〳〵）と言う句、私ねえあの記事を読まして頂いて路郎先生の選句眼と申しますのか、何と申しますのか、ひさみさんよりも路郎先生の方が心憎い程ひさみさんの心の中を突いていられますわ、ひさみさんも苦笑していられると思います。一句一句路郎先生の眼に触れることが恐しくなって来ますわ、私の句も路郎先生の眼の中にいすくんでいる様に思いますの」

「時に話は変りますが此の前私がお伺いしました時よりも人形の数が増えてますね」

「ええみんな戯きものばかり」と言いながら（人形のどれも見飽きた顔ばかり）の句を紙切に書いて

「動きも言葉もないものは淋しいものであり、見飽きのするものですわ」と眼を伏せられた。じっと心のなかの人をたぐっていられるらしい。

「では又」と言うと

「梨里様にいゝ句を誌上でお見せ願える様に」と念を押す様に言い添えられた。

「お伝えしましょう」と立ちあがると、いつの間にか春の西陽が畳の上に流れ込んでいた。

大阪名菓
あなかしかわらぬ
源氏ものがたり
百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話 ㊻三四〇九

一路集

失業

須崎豆秋選

失業が悠々長湯して戻り　九呂平
失業へ哀れ木の葉も札に見え　初甫
近所から失業保険うらやまれ　夢介
失業は好んで辞めたように言い　藤波
失業が北海道の地図を出し　雄々
失業をしても犬だけしっぽふり　清子
デフレ風社長諸共失業し　阿茶
あてもなく失業下駄を減らしに出　春也
失業の日から無口な父となり　赤子
失業へ女であったらなと思い　美能留
失業の新聞隅の隅まで見　賀峰
失業をしたとも言えず弁当箱　寛虚
失業が少ない田畑へ戻って来　白水
失業をして本心へ取り戻し　芳風
失業をして学歴の淋しい日　ひでを
失業の土曜の夜がたよりなし　牧人
失業へ妻の奔走ありがたし　十悟
失業をしたのか年賀来なかった　洛酔
失業へとたんに三月と言う悩み　東岸子
安定所の勤めを失業うらやまし　一恒
失業へ猫の食慾腹が立ち　鉄平
背広着て失業保険とりにゆき　阿茶
失業の眼に富士山が美しい　賀峰
十円の価値失業してわかり　香林
失業をしてから歩く癖がつき　葉光
失業と知らず田舎の母が来る　古竹
失業がバットを半分切って喫い　秀章
隣まで来た失業を不安がり　鉄児
職安へ行く弁当と知らぬ妻　恵二朗
失業と云えず会社を辞めました　太路
失業と知らず洋服着せかける　富士
失業し無慾であった事を悔い　代仕男
失業でなんと都会の狭いこと　一念
失業へばったり人も来なくなり　喜好
失業へ溢れる若さもて余し　鏡水
失業の身の遣る瀬なく手を見つめ　酔子
失業をさしてもらったストライキ　凡九郎
失業の目で見上げてるアドバルン　黒天子
失業はみんな政治のせいにされ　一門
女ならよかった失業の日の日記　芳仙
失業を女房が派手にふれ廻り　十九平
失業の手に豆が出る鍬をとり　古心
失業へ故郷の母の温かし　五茶
失業をして御無沙汰が悔いられる　茶堂園
失業へ妻温かい飯を炊き　白李
失業の群れ職安に日向ぼこ　荘
佳・失業をしてゝも天理教に凝り　日満
佳・流れゆく雲になりたい失業者　満秋
佳・失業をすればあちこちよく痛み　春也
佳・失業の瞳へ煙突が高く見え　トン坊
佳・失業へラジオは笑うばかりなり　ひか平
人・ふら〳〵と東京へ出る失業者　夜潮
地・失業の哀れは詐欺に引っかゝり　雄声
天・失業者何処へ行くのか空が晴れ　和友
軸・失保料貰ってお嫁さんへ行き　豆秋

名士

三鴨美笑選

知らぬ間に名士顧問にされて居り　夢介
恐妻の方でも名士名がとおり　春也
発起人名士の名前だけを借り　木魚
墓参する名士へ故郷の駅がまち　緑風子
仲人を頼まれ名士のお人好し　秀章
二代目の名士実力疑がわれ　雄声
名士きょう芸の細かいとこを見せ　玉兎
頼まれぬ媒酌名士買うて出る　孝平
地方ではどうやら名士で通る地位　満佐志
虫のいゝ寄附帳名士にして仕舞い　とも子
心まで見透すような名士の目　荘
故郷から名士〳〵とたよって来　富士
出世した名士を囲むクラス会　和友
金のいる話名士の名を連らね　良坊
村会は名士の意見のまゝ通り　千年
同郷と云うだけで名士たかられる　貴通
口上手名士に媚びる酒をつぎ　正郎
履歴書へ名士の添書巾がきゝ　黒天子
名士の名かたって宿屋あわてさせ　九呂平
奉加張頼む名士の筆頭　井蛙
色っぽい談話で名士見直され　ひか平
名士の名かつぎ会社をでっち上げ　古心
ベル一つ押せば御用のたつ名士　有子
陳情へ村から町から名士ゆき　白李
発起人名士ばかりが名を連ね　鈴彦
幾人か名士育てたボロ校舎　一策
名誉職名士の妻へもってゆき　初甫
出迎えの群に名士の応揚さ　三平
素樸なる母の言葉に座す名士　寛虚
役人へ名士頭を下げている　一恒
かしこまる一座へ名士のくだけよう　赤子
隠し芸名士得意の黒田節　保夫
自家用で名士の鞄持ちあるき　阿茶

幕合を名士にいどむインタビュー　ひでを
名士ともなれば田舎に用がない　星浦
やす〳〵と名士面会して呉れず　十悟
ワッハッハッ名士の笑い腹から出　洛酔
横しまな名士の恋の派手なこと　美能留

名士だと言われたいのが一等車　藤波
お祝儀も部屋も決っている名士　牧人
グラビヤにのって名士の列に入り　恵二朗
名士とも云われ酒席の退屈さ　雲平
先代は名士としての能も舞い　賀峰

表礼を目立たぬようにする名士　香林
佳・聴衆を煙に巻いて名士去り　夜潮
佳・週末は熱海の宿にいる名士　雄々
佳・紹介状名士は名刺の裏に書き　東岸子
佳・指導者の立場に名士をまつりあげ　葉光

佳・考えておくと名士は軽くにげ　代仕男
佳・ローカル線名士視線の中にいる　十九平
人・念入りの名士の祝辞へ児が疲れ　別城
地・蒸しタオル名士をあまい顔にする　日満
天・祝辞だけ送り名士は湯に浸り　光男

社の黒板

★「川雑川柳まつり」に就て

本社の年中行事として非常な人気を呼んだ七月十日の「川雑川柳まつり」が近づいたので、全国の支部ならびに川雑系各会に於いては、今から句会開催の下準備にかかり、本年はより一層盛大に挙行していただきたい。本社でも、ボツ〳〵その準備にかっている。左に、開催方法について従来と違った点をお伝えする。

(一)開催日は路郎先生の誕生日の七月十日であることは云うまでもないが、万やむを得ない場合は、その前後の日に挙行されたい。本年は日曜日に相当するので一せい開催に好都合である。

(二)路郎先生出題の全国共通特別兼題の出句数其他については会期前に詳細報告するが、本年は予選を行わず路郎先生が集句全部を選句されることになった。

(三)昨年優勝された支部で優勝楯を前もって返還されず、本社の「川雑川柳まつり」に持参して本社の会に参加される場合、その参加者の成績はその支部の成績として取扱うことになった。(但し、支部で不在出句されて、出席された場合は本社では特別兼題の出句は出来ない。)

(四)「川雑川柳まつり」を盛んに挙行することは、川柳人に、熱と力を与えることであり、弘く社会へ浸潤させることでもあるので各支部でもウンと力を入れてもらいたい。句会の方法は本社と連繋を保って、それ〴〵の支部の特徴を発揮されたいものである。

(五)なお、「川雑川柳まつり」を機会に、支部創設を希望される向きは出来るだけ早く本社支部新設係宛に支部規則を請求され規則を知った上で申込んでいただきたい。

麻生葭乃著・米田三男之介装幀

葭乃句集

福寿草

本書は川柳の摂津生葭乃女史の異色ある作品の金字塔でこの機を逸したら再び手に入らぬものである。予定数に達し次第〆切りますから至急申込まれたい。

定價二百五十円
送費　三十円
菊半型・函入

葭乃句集刊行について

川柳界の巨匠麻生路郎師夫人として令名の高い葭乃女史は、現柳壇に於ける巨星であるばかりでなく、閨秀作家の最高峰として、柳壇にゆるぎない地位を、確保して居られるのであります。

女史は、明治四十四年初めて川柳に手を染められ、厳父河盛芦村翁と共に、大阪柳界に伍して其の偉才を認められ、四十有余年作句精進を続けられているのであります。其間、柳豪の夫君が「川柳雑誌」の刊行、川柳図書の出版、川柳の社会進出、後進の誘導等、寧日なきをたすけて、ひたすら柳界のため尽瘁されている事は、周知の通りでありまして、我等は常に、川柳の母として尊敬と感謝を捧げつゝあるのであります。

茲に於て、不朽洞会前理事長中島生々庵博士の発意に賛同、女史の句集を上梓し、弘く江湖諸彦に頒ち度いと、ひそかに企画したのでありますが、謙譲なる女史は容易に、御快諾されなかったのであります。しかしながら曩年、我国川柳界に於ける世紀の聖典である路郎先生の不朽の名著「旅人」が上梓され、その双幅とも云うべき「福寿草」が愈々、葭乃先生の第六十三回の誕辰を記念に、刊行する運びとなったのでありまして洵に御同慶に堪えない次第であります。

女史の作風に至っては、既に定評がありますので、今更喋々を要しないところでありますが、高度の句品と情味溢るるものであることは、常に我等の推奨おかざるところのもので後進の範とするに足る粒揃いの名句であり、不朽の名誉たるを信じて疑いません。

何卒、江湖諸兄姉の御協賛をたまわりたく、左記に依り是非此際一本を座右に備えられん事をお薦めいたします。

麻生葭乃六十三回誕辰

発行者　葭乃句集刊行会
委員長　北川春巣
大阪市住吉区万代西五の二五

発行所　川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇番

★出版予定日・昭和三十年四月末日、五〇〇部限定出版
★御送金は川柳雑誌社の振替口座大阪七五〇五〇番を御利用が便利です(切手代用可)

雑筆春秋

新聞碁譜其他

福田山雨楼

○碁の木谷八段は神戸の出身、怪童丸とうたわれた時代から呉清源と共に新布石を編み出した頃の名声はすばらしいものがあった。ザル碁党の自分は木谷氏の棋風が好きでその新聞碁譜は昭和の初期から集めていた。終戦後同氏が平塚で戦災にあい丸焼けになったことを知った自分は、二十二年の頃それまでに集めた新聞碁譜の名局約五百のスクラップを同氏に進呈した。すると分譲してもらいたいと自分の意向を聞かれたので遠慮なく申上げると、それに数倍する金子を送って来られた。その碁譜の中には呉八段との十番碁で打込まれた悲壮な局も交っているので、昨今の不調と思い合わせて悲痛な感じがしてならない。

○昭和十九年戦争がたけなわな頃自分は或る外廓団体に勤めていたが、同僚に奥田童山と云う俳人がいた。彼氏は歌人斉藤茂吉と昵懇であった。当時は酒も配給でたまにしか飲めなかったので酒客で知られた茂吉老も渇をおぼえていられたに違いない。童山老一計を案じ丁度自分が受持っていた赤坂三会堂の集会の席に隣してテーブルを占め、自分の顔で追加注文のできた酒の分譲を懇請された。茂吉老の満足は云うまでもない、後日鄭重な礼状が届けられた。遺墨として自分は保存している。

○宛先が全然ないただ「福田山雨楼様」とだけ書いたハガキが用件の間に合う時刻までに届いた話。これを詳しく話すと手品の種明しのようになるが逸話として聞いていただきたい。頃は昭和の初年、当時湊町保線事務所に勤めていた弱輩の自分の名を郵便局のものが知らう筈なくフセン付きで発送元（川雑同人里十九の経営するカナメ喫茶店）へつき返された。たまたま路郎先生が居合していられたので直に手紙を添えて送っていただいたので同人会の集りに間に合ったと云うわけ。今もこの手紙は大切に保存している。ハガキの筆者は当時八面六ビの動きをしていた総務の橋本緑雨氏。

緑之助氏と三十年

吾郷玲人

一昨年路郎先生の柳界五十周年を迎えられた感激も納らない内に今又川雑出雲支部が創設三十周年の佳き年を迎えられた事は誠に御同慶に堪えない。

本年で三十年と云えば、昭和元年が大正十五年十二月からであるから、同支部（当時は簸川支部）の胎動は大正末期からすでに初まっていた訳けである。

当時二十才そこ〳〵であったと思われる尼緑之助氏は地方青年の同志であった尾添雷相、吾郷琴朗、尾添幸永氏等と共に新聞柳壇で盛んに活躍されていた事を、当時小学校に通っていた私はおぼろながらに記憶している。

大正末期と云えば「川柳雑誌」が創刊された頃であるからその創刊より一二年遅れて同支部が結成されている事になる。その支部幹事として三十年もの長い期間を幾多の辛苦を排して今日迄同支部の発展育成に努力された緑之助氏の功もさる事ながら、同氏を扶けて鋭どい視覚で独自の句風のあった故澄田羅門氏の功績の大なる事も揚げねばなるまい。羅門氏を亡くされた事は緑之助氏に取っては勿論出雲支部に取っても大きな痛手であり損失でもあった。

今若し羅門氏健在なれば、緑之助氏の勤められて来た幹事としての三十年生活はあるいは保て得なかったかもしれない。

健吟家羅門氏を中心に、板倉与詩雄、井原鴉天、河谷田鶴緒、藤野華村氏等の抒情的な作家の多かったのも出雲支部の異色的存在であった。

昭和五六年頃から昭和十年位迄の間には大阪より路郎先生等をお迎えして出雲、松江、八束等の各支部を初め各地の柳人と盛んに交流されたのも想えばなつかしい川雑王国「出雲」の最良の頃でもあった。

戦後緑之助氏の川柳に対する情熱はいち早く燃やされ多忙な公務の寸暇を割いて出雲支部の発展に寄与された努力は見逃がせない。

一昨年公職の身を退かれて以来は氏の温厚柔和な人柄と川柳に対する烈しい愛着を慕って氏の膝元を囲む同志の数は日毎に殖えて地方青年の文化の啓発にも少なからぬ貢献をなされて来た事は、川柳に徹した三十年の長い間の努力の現われと深く信じ、今後共益々同地方の文化へ大きな足音を残されん事を切に念願致す次第である。

一九五五、二、二八稿

郵政相の落選

長野文庫

愛媛県第一区から立候補した武智郵政大臣が落選したことは大番狂わせと云うより愛媛県の大恥で、悪い意味で松山を有名にした甚だ情ない恥ずかしい次第であった。選挙中の予想では第一区は無競争に等しい選挙区だと噂されて居た。それは定員三名に対して立候補者が五名であり、その内共産党員が一名、汚職議員が一名ある故他の三名は絶対確実の太鼓判が押されて居たからだ。共産党は恐らく二千票程度、汚職議員は二万も投票があれば関の山と云う県下一般の予想を裏切って開票して見れば汚職議員が四万六千票も取り郵政大臣を八千票近く引き離したことは全く意外であった。これには県民何れも開いた口がふさがらなかった。この原因を探究して見れば色んな理由があるだらうが、結局は県民の心の甘さであると云える。よく一つ話に「伊予の人間が歩いた跡には草も生えぬ」等と愛媛県人がさも悪党の様に云い蝕らすが実はさにあらず愛媛県人の性根は頗る甘くのんびり出来て居る

のだ。その欠点が選挙戦にも度々現われて居るのを見ても分るし又詐欺事件等で県下に被害者が全国有数多いのを見ても分るだろう。来客に葡萄酒を一合ずつ持って来させたら、それがみんな水であったと云うフランスの笑話と同然の結果がこの選挙にも現われたのだから、人が悪いと云えぬことも無いが大体はその心根はお人好し的である、結果に於て有権者が汚職議員を選出したとなったのだが、その内容はA、B、Cの三候補は絶対大丈夫だ。D候補は汚職議員だがあんなに泣くので可哀相だから一票入れてやれと云う他の候補への投票すべき票中のフラ〳〵浮動票が汚職候補への投票となり、その集積が四万六千票となったものと考えられる。発表後何れも呆然として、馬鹿なことをしたものだと後悔したが、愚痴を云っても始まらないことである。愛媛県ではこれ迄こんな選挙結果が四回ばかりあったが、お互に気をつけて今後こんな愚かしい選挙を繰返さない様にし度いものだ。

大臣が汚職の金に射落され

「ふるさと」を読みて

堀口塊人

この一文は「ふるさと」の著者宛の私信であるが好事師なので発表させていただく（編集局）

拝啓　句集「ふるさと」拝受御厚情厚く御礼申上げます。早速出勤のポケットへ入れて家を出ましたが、実はそれから医者へ行きまして、たんのう炎治療をしたのであります。それは細いゴム管を胃から腸へ入れまして薬を注入しそれから、たん汁を口の方へ流し出す方法でありますが、約三時間を要する治療でありますので腹中にゴム管を入れたまゝ「ふるさと」を拝読したのであります。そして思わず「うまい」と叫びました。いや叫ぶことは出来ませんので肚へ大きな息を致しました。そしてさらによく味ってみますと、これは「うまい以上」の作品であると感心致しました。先ず何よりも気がつくのは、おほらかな温情であり、ゆたかな愛情であります。一番はじめに「口髭を生やして猫の子が生れ」にしても「出勤へヒョコが少しついて来る」にしても「恐わい風だったと雀しゃべり合い」にしてもそれ等の小動物といっしょに生活して居られる気分がうれしいと思います。しかも貴兄の愛情のゆたかさは動物のみではなく「均一の中にさみしき荷風集」のように「看板の裏で茄子の花が咲き」のように植物や無生物にも及んで居るのは嬉しいと思います。しかし何と言っても「天国へトボ〳〵行くか尾を垂れて」のように人情味の惨み出た句の美しさが印象的です。それから貴兄は実に愉しんで句を作って居られるように思います。これは楽々と作句せられるという意味ではなく心のよろこびを味わいながらお作りになって居ることと想像されます。そうでなければ「電話口花千代さんは舌を出し」「地蔵さん六っならんでいる月夜」「ほの〳〵と元旦になる酒のいろ」のような愉快な詩情のある作品は生れないと思います。それから又時として「文学にかぶれて死んだことにされ」「くゝられて刑事と話しながらゆく」「むかしむかし稼げば楽になりしとか」の鋭い世相批判の句のあるのにおどろきます。こんな句を拝見すると温情な貴兄のどこかに、しっかりした一本の筋金がはいって居るように思われます。かゝる作品は素直で正直な性格が世の矛盾を極端に嫌悪をする結果生れるのではないでしようか「佳い年をとれよとパチンコ屋で袂れ」ともあれ人生の旅人として貴兄の文運のます〳〵御さかんである事をお祈りいたします……

（後略）—昭和二十九年々末—

BK放送川柳

課題「寝台」

中島生々庵選

佳作

米子市　小西雄々

寝台で車掌も旅をしてみたし

堺市　八木摩天郎

寝台へもう来る時分午後六時

徳島県　原浜子

ベッドから下りた素足が春に触れ

近江八幡市　広瀬俊子

ジェッド機は見えずベットへ戻りくる

神戸市　矢野とりゑ

寝台がひとつポツンとあるくらし

兵庫県　吉原紅月

寝台の具合も主治医聞いてくれ

京都市　井上吉造

今日までの無理を話して居るベッド

兵庫県　出口白猫児

退院も近く寝台試歩で留守

岸和田市　中村三四郎

寝台はアゴでお見舞受けて居り

貝塚市　斉藤一蝶

寝台で涙もろさを笑いあい

大阪市　山川阿茶

靴ぬいでベッドへ一寸坐ってみ

姫路市　水谷斗鶴

やせたのが寝台のバネためしてる

神戸市　古谷日出夫

上役の見舞ベッドにかしこまり

大和高田市　岩垣日本村

御機嫌を取る寝台の風車

徳島県　三橋栄

寝台車一駅毎に朝になり

入選

第三席

大阪市　正本水客

独身の楽しさ寝台の位置花の位置

第二席

岡山市　服部十九平

餞別の中味を見てる寝台車

第一席

京都市　泉竜一

寝台の堅さデフレのハネムーン

本社四月句会

日時　四月九日（土）午後六時

会場　光明寺　天王寺区下寺町二丁目バス停前

兼題　「養生」路郎選　「義理」春巣選　「青空」淡舟選　「畳」花村選

席題　四題（当日発表）

柳話　麻生路郎

川柳雑誌社句会部

江戸川柳に詠まれた市川團十郎（三）

―其の家紋を中心として―

阿達義雄

（三）三筋立に鯉

（イ）三筋立に鯉と七代目団十郎

市川団十郎家の定紋は三桝紋として知られて居ったが、他に替紋として三筋立に鯉といふのがあった。それは、

○替紋も川魚の王花の王（一四二）

――三筋立に鯉と牡丹。

○替紋の鯉おもにひく小網町（一二二）

――小網町附近にあった魚河岸連の団十郎贔屓。

の二句が之をよく語ってゐる。右の句には鯉だけしか詠み込まれてゐないが、三筋立を詠んだものとしては、

○本家は一筋成田屋は三筋也（一一三）

○木場で組む敷居のみそも三筋立（一二〇）

――七代目の隠宅は深川木場にあった。

明治の名優九代目団十郎の本名は堀越秀と言ったが、この団十郎家の祖先は甲斐の士、堀越十郎で、槍一筋の家柄なのであった。

又、木場の敷居が三筋なのが自慢であったと詠まれてゐるのは、七代目が質素倹約の令に触れて、天保十三年、江戸十里四方に追放されたのと思ひ合はせて考へられることであり、その居宅に関しては、長押造りにし床に塗がまちが用ひられたとある。その隠宅の豪奢なことが当時の噂になってゐたことなども多くの川柳によって之を徴することが出来る。

『柳多留』に於て、三筋立に鯉を詠んだ句は、その一二を除けば、大体に於て文化十年以降のものであり、此の頃は七代目団十郎の活躍時代であるから、之等は七代目を中心として詠んだものと考へても良さそうである。

その時を得て活躍してゐる有様は、

○時を得てのぼるは滝の出世鯉（一〇七）

――之は文政九年開きの句であるから、七代目の上方登りと解することは不可である。

○滝登る鯉で飛竜の威をふるひ（一〇七）

○魚と役者の親玉は目玉なり（八二）

○市川の鯉つがもなへ風味也（六五）

――「つがもねへ」は七代目団十郎の常套語。

○酒座の大詰千両の洗鯉（　）

――酒宴の最後に出る鯉の生作りに千両役者の団十郎をかけたもの。芝居の大詰に出るのは千両の目玉。

この頃の団十郎流行には、人々をして龍宮の芝居にも団十郎をと思はせるものがあった。

○竜宮の芝居で鯉のあら事師（一〇七）

団十郎の屋号が成田屋であった処から、観音――手に魚の籃を持った魚籃観音を立女形などに附会して、

○成田屋を御手に魚籃の立をやま（一一五）

○アレ魚籃観音さまが鯉を提げ（一四三）

○川の魚一年まシに鰭がつき（文化）

丙句を八代目の成長発達を詠んだものとして解するものもあるが、今後の研究によって出所が判明し、もし文化の年号が若ければ、七代目として解した方が自然である。

（ロ）三筋立に鯉と其の贔屓客

七代目は、天保三年三月、長男海老蔵に八代を譲って、自ら海老蔵と名乗り、その後も盛んに活躍してゐる。八代目の人気も七代目にもをさ〳〵劣らなかった。

荒事を得意とする団十郎に女の贔屓も相当に多かった。それは、

○鯛よりも鯉の目玉が娘好き（二二三）（二二四）（二二七）

○下女ひいき及ばぬ鯉の滝登り（六七）

等によっても分るが、何と言っても、威勢のいゝ魚河岸連が団十郎の大の贔屓筋で、彼等の団十郎に対する謳歌は白熱的であった。

○打鈎で引ッぱってゐる出世鯉（一〇七）

団十郎の替紋を将軍家御料の紫鯉に言ひかけたものとして、

○難波へは登せぬ江戸の御留鯉（一〇七）

と云ふのがあり、団十郎の荒事は天下に冠たるものとして、「お江戸団十郎見ッさいな」と言はれ、江戸の誇ではあったが、万事気風の柔かな上方には余り向かなかったのか、団十郎の上方上りといふことは、初代以外には余り聞かなかった。たゞ、

※浪花津へ咲くや此度福牡丹（一二〇）

――手習の歌「浪花津に咲くや此の花冬ごもり云々」の文句取。

○鴻の池へも顔を出す江戸の鯉（一二〇）

とあるのを見る。「浪花津へ」の句は、丑の六月二日開き、即ち、文政十二年六月の句であり、（この頃、）七代目は、文政十二年に「極上上吉」に進み、五月高野詣から大阪中の芝居へ出演してゐるから、恐らく右は七代目初上りの句であらう。「鴻の池へも」の句は同じ年の八月四日開きの句である。

『川柳江戸歌舞伎』には、右の二句を天保の吟と誤ってゐる。この二句は、

柳多留百二十編中のもので、百二十編の序が天保三年となってゐる処から誤ったものであらう。但し、右二句の開卷期日は文政十二年の六月二日と八月四日である。

（八）団十郎と座主・役者

市川団十郎の五代目は享和二年に牛島に隠退し、六代目は寛政十一年、年二十二歳で夭折し、堺町芝居茶屋和泉屋勘十郎（母は五代目の次女）の子である七代目は、寛政六年八月、桐座に於て初舞台を踏み、同八年冬、河原崎座で初めて暫を勤め、同十二年十一月、市村座で襲名をしたのであった。

○鯉で春しめるは権三権之助（七三）

右の句の作られた年、即ち文化四年の冬には、更に元服して立役に進んでゐる。

権三といふのは、江戸向島にある鯉料理で名高い武蔵屋権三郎のことで、権之助は河原崎座主の名前である。鯉は団十郎の替紋三筋立に鯉と鯉料理の鯉とに利かせてゐる。

○川魚をどくだてにする惣役者（寶暦十三年松ー、ウラ）

――前句「おくびやうな事〳〵」

宝暦と言へば、四代目団十郎の頃で、三筋立に鯉が、今、日の出の勢にある市川団十郎の替紋だと言ふので、総ての役者が鯉を食ふことまでも遠慮するといふ意味であらう。それで、前句の「臆病なこと〳〵」に附くのである。

次に、団十郎と他の有名な役者との取り合はせを詠んだものに、

鯉の相手に滝のやはあたりなり（八四）

滝野屋は市川門之助の二代目以降の屋号。滝の相手に鯉（団十郎の三筋立に鯉）といふ縁語仕立で、「あたり」は「当り」「中毒」の両意を含ませたものであらう。

○引ッ立たぬ鯉に鮗ははねられる（二〇七）

「引ッ立たぬ鯉」は舞台上に於て、テコでも動かず悠然と構へた団十郎。鮗は歌舞伎十八番の暫に出て来る鮗坊主で、宮崎十四郎の得意とする役である。右の句は、舞台上に於て、右二人が演ずる或る情景ではないかと思ふ。

壇の浦（上）

冨士野鞍馬

源平決戦

屋島を敗退の、平家一門は、引続き安徳帝を奉じて、九州へ渡るべく、海上を西へ走ったが、九州も、周防、長門も、反平家になっていて、上陸も出来ず、遂に、長門の海上、壇の浦で、源軍と、最後の決戦をすることとなった。「平家物語」に

「さる程に判官、八島の軍に打ち勝って周防の地へおし渡り、兄の三河の守と一つになる。平家は、長門の引島に著くと聞えしかば、源氏も同じ国の内、追津に著くこそ不思議なれ」

と見え、一の谷合戦には、水軍をもたなかった源軍も、ここ一年の間に、造船して、水軍の訓練もととのえ、多くの軍船をもってこの合戦にのぞんだ。

「源氏の勢は重れば、平家の勢は落ちぞゆく。源氏の船は三千余艘、平家の船は千余艘、唐船少々相交れり。元暦二年（寿永四年）三月二十四日の卯の刻（午前六時）に、豊前の国田の津、門司が関、長門の国壇の浦、赤間が関にて、源平の矢あはせとぞ定めける」、

と「平語」は書いている。

船の上とは落つかぬ皇居なり（タル四〇）

帆柱の元を平家の紫宸殿（芳賀三）

安徳帝を奉じているのだから、船の上の皇居ということになり、御座船の中央が、紫宸殿にあたる。

福原のあとわたつみへ連れ申し（タル二四）

また、福原の行宮以後は、海上を逃げ廻って、遂に壇の浦まで来た。「わたつみ」は海のことである。

舟むしに門院はじめそうにたち（拾五）

海上生活はつらい。門院は、帝の御母、建礼門院である。

雲の上二た昔目は浪の上（芳明五）

平家の栄華二十年という。

（拾五）

平家方小便もせず舟にのり

鉄漿はつけて居られぬ壇の浦（タル三九）

壇の浦笏で四五はい盛って食ひ（拾五）

平家の公達は、みなオハグロをつけていた。その狼狽ぶりが川柳になっている。

二位の尼と安徳帝

「平家物語」に

「二位殿は、日頃より思ひ設け給へる事なれば、鈍色（にぶいろ）の二衣（ふたつぎぬ）うちかつぎ、練袴のそば高く取り、神璽を脇に挾み、宝劔を腰にさし、主上を抱き参らせて、「われは女なりとも、敵の手にはかかるまじ、主上の御供に参るなり。御志思ひ給はむ人々は、いそぎ続き給へや」とて、しづしづと舷（ふなばた）へぞ歩み出でられける」

「二位殿やがて抱き参せて、「波の底にも都の候ふぞ」と慰め参せて、千尋の底へとぞ沈み給ふ」

と記述され、二位の尼とは、清盛の妻で、建礼門院の母、安徳帝の祖母にあたり、従二位だから、そう呼ばれていた。

七どのや出て下さいと二位尼（タル五一）

七どのとは、悪七兵衛景清で、景清は、壇の浦で行方不明になり、後日物語がある。

櫛巻にしろと二位どの下知をなし（拾五）

平家の女どもは、みな下げ髪であったから、川柳作家は、安永の頃、江戸

の浅草のお六がはじめた、軽便な「櫛巻」にしろと、洒落ている。

二位殿の入水年に不足なし　（タル七〇）

二位の尼は六十を越していた。

二位どのは小意地をわるくさして行（タル八）

二位どのは我物顔に一本さし　（〃五五）

そして、神器の宝劔を腰にさして、神璽を脇に挾んで、幼帝を抱いて、海に投じた。「平家物語」は

「宝劔は失せにけり。神璽は海上に浮びたるを、片岡の太郎経春が取り上げ奉ったりけるとかや」

と書いており、三種の神器の内、宝劔は、この時失せたとしている。

だいてはいるとは二位どのが言はじめ（タル八）

蜆貝海へかくした二位の尼　（〃一〇六）

安徳帝は、その時八歳で、一説に、女であったともいわれていたので、「蜆貝」などと川柳に作られ、また、

こじつけの帝を船へ乗せ申し　（給五）

こじつけの帝を船へ乗せて逃げ　（タル十八）

二位の尼裾を捉へて遊ばせる　（万安三）

と、川柳は、それにしてしまってる。

二位どのにおぶつて出ろとみことのり（万明三）

壇の浦うちへ行かうと詔り　（〃）

等と、幼帝を想像し、

母方に安徳帝はずり込まれ　（万安四）

母方は平家であり、

竜宮鼎動安徳帝御幸　（タル一六七）

海底の龍宮ではびっくりしたであろう。

西海の波に漂ふ竜の御衣　（タル一三五）

「平語」には「山鳩色の御衣にぴんづら結はせ給ひて……」とある。

みくずにならせ給ふとはやすいとく　（万安九）

等、ちと失礼な句も見える。

知盛と教経

平軍では、何といっても、従二位新中納言知盛と、正五位下能登守教経とが、軍の中心であって、「平語」にも、派手に書かれている。

壇の浦能州出やと笏でつき　（タル三）

一門のきなかと頼む能登守　（〃初）

と、教経の強さに、多大の期待がかけられていた。

教経は、義経を見つけて、挑戦したが、有名な話の「八艘飛」で逃げられ、

飛んだ身の軽い野郎と能登守　（タル四四）

能登守蚤を逃がした顔つき　（給五）

義経は八艘飛んでべかこをし　（〃）

男ならここまでござれ能登守　（タル四九）

等と、川柳に作られている。それで、最後を観念して、鎧も、長刀も投げ捨て、源軍の、安芸の太郎、次郎の兄弟を、両脇に取って挾み「いざそれおのれら、死出の山の供せよ」といって、入水した。

能登殿は二人禿で入水をし　（給五）

教経の入水あぶくが三つ出る　（〃六）

教経は、義経と同年の二十六歳であった。

知盛も続いて、乳兄弟の、伊賀平内左衛門家長と共に、鎧を二領重ね著て、一緒に海へ沈んだ。時に三十四歳。

新中納言は平家での光る君　（タル一八）

知盛は、清盛の三男、教経の従兄で、美男であったらしい。

壇の浦の後、十一月に、義経が頼朝に追われ、四国へ亡命しようとする途、摂津の大物が浦を船出の時、知盛の亡霊が浪風をおこし、義経一行を悩ましたということが、謡曲、長唄などに「船弁慶」として作られているので、次のような川柳がある。

知盛は総名代のうらみに出　（タル一五一）

ああうらめしやこわい土左衛門　（〃十四）

等、平家亡霊の代表といい、

知盛は璽にもならずももんゲワア　（〃四八）

はさめ〳〵と知盛は下知をなし　（〃九九）

知盛は長刀あとはみなはさみ　（〃一〇一）

入水した平家の人々は、壇の浦の「平家蟹」と化したという伝説がある。

知盛はケンカ過ての棒をふり　（タル初）

知盛が長刀鮫は呑こまず　（〃七四）

「船弁慶」の所作には、長刀を持っているので、こうも詠まれ、

知盛をしやぼんのやうにいのりけし（給五）

怨霊はきえて源氏の浪になり　（〃）

大物浦の暴風も、弁慶の祈りで、おさまったということになっている。

飛燕往來

▼築山快夢起氏（ホノル、市）より

（路郎・直乃宛）

（前略）小生もお蔭を以て家族一同と皆々無事毎日を感謝の裡に送って居ります。予て御報申上ました小店The Gif Boxも幸に好い買手が見付かり去る十四日店を引渡し、之で全く自由な身になり、何だか浴衣がけで川端でも散歩している様なサバ〳〵した気持です。他人様に店譲渡しの話をしますと「御隠退ですか」と問われますが、どう致しまして、まだ〳〵年齢漸く六十五歳を迎えた許り、若い時分の体力こそありませんが、志気旺盛、それに幸にして老後働かずに安楽に送れる身分でもありませんので一週の半分位は働いて収入の道を計り、あと半分は庭いぢりや教会YMの御用をサービスする積りで居ますので、その間、読んだり書いたり、恐らく退屈したり用無しで困るなどと云う事はありませんから御安心願います。これまでチンピラな店でも経営していますと朝夕の時間は厳守せねばならぬし、店の切廻し、さては金の工面に縛られておったのが全くそれ等から解放せられ、どの位気楽になったか知れません。たゞさえ「バ、は呑気だから長生しますよ」と云われているのが、この調子ですと長生年齢に更に十年位加わるかも知れないと云う心境で実に愉快です。（後略）二月二十日。

いのちある句を創れ

花地梅壇

投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社二月例會（大阪市）

二月十二日　午後六時　於光明寺

暦の上の春とはいえど、春なお遠く、梅も未だ薫らぬ、十二日、本社句会は、寒さも意に介せぬ人々の集い、寺門に掲げられた提灯が路郎師染筆の白布にかわって、墨痕いともあざやかに、そのなつかしさと、雅趣は来会者の目を驚かせる。いつもながらの盛会である。新人多数の顔も見えた。路郎師の柳話はルーブル展の観賞に就いて話され、川柳鑑賞にも類似の点ある事に話及び、選者の座にすわる人は須く種々の分野に於て知嚢を養っておく必要があると諄々と説かれた。次いで席題、兼題の披講に入り、本日の不朽洞賞優勝カップは北川春巣氏が把握し、新理事長としての貫禄を示された。閉会、時に午後九時。（摩）

出席者‖路郎・黙平・真一・水堂・潮花・紫香・いさむ・杏花・玄武洞・蘇堂・雅堂・一朗・望峰・一三夫・一飄・ひろし・煙司・とし・喜好・摩天郎・鉄心・香林・倚徳・全間・静馬・文秋・丁路・省三・赤子・十悟・喜仙・好郎・賀峰・牛歩・栞・春柳・美根二・淡舟・義広・花村・雄声・春巣・梅里・恒明・多久志・与呂志・夕霧・雪山・古方・正斗・梨花・井ッ平・六竜子・白水・凡九郎・白柳子・小松園・へとち・鳩花・葭乃・梨里

兼題「イニシャル」　麻生路郎選

綿々と書いてイニシャルだけで止め　一飄
イニシャルだけは名士と同じなり　文秋
いれずみにされてうれしいイニシャル　恒明
手がかりのSの一字へ鑑識課　省三
製材所愛のイニシャルまた見つけ　喜好
イニシャル薄くよごれている詩集　賀峯
頭文字丈け書いてあり寄附がしら　小松園
イニシャル丈の手紙を疑われ　省三
それからの便りはいつもイニシャル　煙司
イニシャルブローチに付け不良じみ　文秋
イニシャルをむしって質屋へ持って行き　望峰
イニシャルのまゝで山宜死んで逝き　摩天郎
イニシャルの入ったシャツが運のつき　一平
イニシャルそのまゝ着てる貰いもの　阿茶
頭文字だけで徳球名を知られ　摩天郎
書いて消し消して書いてるイニシャル　真一
イニシャル位で親は騙されず　杏花
煙突の煙が描くイニシャル　春柳
頭文字丈けの忠告とは淋し　小松園
イニシャル丈けのサインへ並はされ　春巣
イニシャルはあるがアメリカ中古品　路郎

兼題「真実」　戸田古方選

ある夜ふと真実と紙に書きにけり　得一
真実をすら〳〵言えぬ話下手　静馬
死化粧をしてやり女の真知り　好郎
真実を女給は疑うくせがつき　望峯
真実がないと知ったは出来てから　梅里
聖像を踏ます教えに殉死する　義広
真実の隣りにデンと懺悔録　へとち
真実はいれられず雲の去来見る　栞
真実へ税吏もすこしうち沈み　日満
真実はこうであったと云い切れず　摩天郎
真実を話していつも不運で居　蘇堂
真実はそうでなかった追悼文　花村
割り切れぬ真実へちと不安がり　いさむ
真実の恋もペン〳〵疑われ　喜好
相棒が死んで真実ちとしゃべり　紫香
スラ〳〵と喋り真実うたがわれ　夕霧
童心の真実警羅まで泣かせ　春柳
おこられに来て真実へ泣いて去に　省三
筆不精真実までも疑われ　梨花
真実一路地獄とやらも考えず　潮花
病人へ真実知らす役でもめ　一ン十
真実を知る古文書の大和仮名　煙司
真実は信じながらも逢いたくて　阿茶
真実の蕾異変へ迷わない　十悟
真実を外れて雄弁続くなり　杏花
真実へ耳をかさない程ひがみ　一平
あざけるもよし真実は話すまい　春柳
真実は一人ぼっちにされちゃった　恒明
さめ〳〵と泣く真実が美しし　春巣
真実を阿呆一人が知って居る　小松園
真実のわかった頃は死んでいた　栞
真実を話す女を持て余し　与呂志
そら事の世に真実は母一人　多久志
無口の真実がうろ〳〵声になり　白柳子
からかっているのに真実あかされた　登志子
真実を通すに永い時間がいり　香林
真実を見せて呉れたと語る朝　美根二
真実は云えずうそはなほ云えず　正斗
真実が女を清いものにして　白水
真実はかく佯るとも知らず　古方

兼題「金利」　清水白柳子選

利子で喰うなぞとは覇気のない男　蘇堂
国債の利子へ電車が高くつき　香林
金利には触れず商談纒められ　煙司
算盤はこんだけ利子があるつもり　恒明
へそくりの金利あんみつ程の高　紫香
返す気もないのが金利聞いている　梨花
スクーター金利に追われる音になり　小松園
保証人にされたり利子も払ったり　鉄心
預金利子歯屎のようについてくる　十悟
他人の金に善人せっせと利を運ぶ　玄武洞
やっと全快したに金利でまた倒れ　喜好
子に貸した分の金利も払わされ　賀峯
置炬燵持たぬ金利を勘定し　井ッ平
外債の金利まで習ったりした明治　古方
子供銀行キャラメル程の利子がつき　花村
文化とは利子で喰えないことだった　香林
中風で臥てゝも金利忘れてず　春巣
十割の金利笑って子に払い　日満
金利には追われる約手を追い廻し　省三
金利ゆえ沈め金利に囲われる　一三夫
子の宿題の金利計算までさゝれ　白水
子種がないのに金利ばかり追い　淡舟

兼題「空腹」　小川恒明選

空き腹にさせて子の意地解き日ぐし　日満
助かった意識が腹へこたえて来　鉄心
空腹のせい達筆がやゝふるえ　賀峯
義理の仲空腹すなおに言い切れず　登志子
空腹を知らぬ動物園の猿　義広
空腹に夜汽車鉄橋わたる音　正斗
空腹のまゝで待たせる妻の風呂　摩天郎
すき腹へ泌み込む様な風の音　潮花
空腹をこらえて帰る恐妻家　春巣

空腹を知らぬ女中の頬の艶　水堂
三杯目から空腹は味を知り　淡舟
空腹へやけ酒がちとこたえて来　いさむ
空腹をこらえた妻の美容術　与呂志
職安へ空腹らしい顔も見え　一洞
空腹へ見晴らしなぞと云うとれず　赤子
親切が届きがつ〳〵食べてくれ　香林
煮える間も待てず空腹箸を持ち　夕霧
空き腹で帰れば鍵がかゝって居　一三夫
みんな帰してホンにおなかすきました　栞
子守唄だけで空腹泣きやまず　雄声
空腹に石油コンロ故障して　ひろし
空き腹で急ぐ家路に吠えられる　蘇堂
延手形貰て一ペンに腹がへり　十悟
ルンペンのパンを野良犬見つめてい　阿茶
空腹も政治の所為にして早寝　恒明

席題「炎」　川村好郎選

十年の炎押えて未亡人　多久志
炎もうお七を包む色になり　潮花
燃やすだけ燃やした恋の過去なもち　牛歩
やきもちの炎へ長屋智慧をつけ　水堂
我が知性恋の炎へとゞきかね　文秋
炎とは別に女房の思案あり　与呂志
鏡台にうつる炎のサタンめき　栞
蕾を焼く炎故郷の香りする　梨花
その果ては知らず炎と燃えよ恋　恒明
恋の炎燃やして内気より言わず　雄声
情熱は炎となって夜の底　杏花
焼け落ちる炎前編終りなり　恒明
肺を病み炎もいつしか消えてゆき　夕霧
闘焼く炎佗しい音を立て　一飄
もう焼けかいなおんぼが見る炎　喜好
燃え残る炎よ俺はまだ五十　多久志

席題「あんま」　黒川紫香選

叩かせる師匠も雨を聞いている　潮花
せなに雪のせてあんまが上って来　省三
あんまから世渡りの術教えられ　香林
温泉で深雪のようなのに揉まし　黙平
身の上も話しあんまは腰を据え　杏花
どの角へ折れたかあんまの笛が消え　賀峯
あんま呼ぶ母の体が弱々し　いさむ
女房を先にもませてぬるい燗　蘇堂
十円は十円だけの子のあんま　文秋
あんまだ還らぬ息子を話し出し　好郎
あんまそろ〳〵南京虫に気付いて居　潮花
新薬をけなしてもむ手に力入れ　静馬
不景気な話であんまもみおさめ　春巣
そこいらの噂あんまが集めて来　十悟
炊事場の音へあんまも顔をむけ　一飄

席題「三等車」　八木摩天郎選

御詠歌の団体らしい三等車　梅里
借金も知らず三等車で通い　文秋
三等車一ト駅ごとに客かわり　いさむ
三等車気安い連れがいて楽し　淡舟
更生資金白衣の稼ぐ三等車　春巣
三等車それでも社長と云う名刺　恒明
三等車にばかり検札やってくる　正斗
闇米の値ぶみしている三等車　真一
三等車かるい噂が隣り合い　十悟
旅費だけは二等三等車で出かけ　牛歩
旅はよし三等車にて茶をよばれ　煙司
梅干の種踏まされた三等車　紫香
三等車にしても出張足を出し　省三
お隣りにみかん貰った三等車　淡舟
言伝もこま〳〵三等車のデッキ　蘇堂
新婚がたゞ黙ってる三等車　雪山
チョコナンと母は三等車へ坐り　春巣
団体がとてもうるさい三等車　恒明
三等車名刺も出さず友になり　望峰
三等車わしが国さの声太く　鉄心
三等車お国自慢が乗り合せ　省三
三等車庶民のぐちを聞いて居り　一朗
三等に乗って二等車なみに取り　喜好
単線の此処から故郷へ三等車　玄武洞
三等でよろしと新妻云うてくれ　赤子
犬ころの様に寝ている三等車　潮花
三等車右も左もよくしゃべり　春柳
三等車やみ米さんがいばってる　凡九郎
かつぎ屋が顔がきいてる三等車　ひろし
駅弁をまとめて買った三等車　煙司
出張はまだ三等の僕の地位　水堂
青雲は成らず三等車の固きイス　六竜子
三等車家出娘が小うなり　一朗

席題「二日酔」　互選

二日酔不覚と思うとこで飲み　煙司
櫛入れぬ頭で来てる二日酔　摩天郎
神妙に愚痴を聞いてる二日酔　水堂
朝飯を水ですました二日酔　ひろし
二日酔長女に水を頼むなり　小松園
算盤が云う事きかぬ二日酔　杏花
二日酔知った女房の洗面器　与呂志
新聞が寝床へ届く二日酔　一朗
二日酔養子にきつい風あたり　潮花
二日酔に触れず朝の髪を梳く　玄武洞
二日酔よんべのつれを悪く云い　多久志
三日酔無事に帰ったのが自慢　蘇堂
妻の愚痴唄に聞いてる二日酔　十悟

雑川　**淀川支部句会**（大阪市）

二月九日　於　香林居　武部香林報

一粒を十に数えて歳をとり　真一
人妻がそや〳〵今日は節分だ　多久志
豆まきに間に合うように父帰り　発中
節分でない日も女化けていた　花村
節分も過ぎて一年嫁きおくれ　多久志
口上手うっかり乗って買わされる　柳詩
ないしょやで姉は口止料を出し　以策
呑む話だけは手まねで用をたし　文平
二死満塁チャンス〳〵に手を叩き　曲蝶
山門に老母の手をとる麗らかさ　香林
今どきの医者はと薬煎じさせ　若菜
寄附帳へ頑固が派手な額を書き　水堂

雑川　**出雲支部句会**（出雲市）

二月十五日　於　図書館　尼綠之助報

運命は神知り給う事ながら　荘
意外にも妻の無言が続くなり　岬月
熱弁の狙いは女の浮動票　独仙
熱弁が頽勢遂に挽回し　白鷗
ようしゃべる女やなあと拍手する　綠之助
熱弁がうっかり駅を忘れかけ　鳳城
熱弁はマイクが邪魔になって来る　勉
サーカスの笑顔の裏を見て了い　輝圀
性格を竹刀に見せて初稽古　章坊
ラブシーンがふと思い出につき当り　雲平

雑川　**京都支部句会**（京都市）

二月十六日　於　仲源寺　大鶴喜由報

学校当時から朗らかと言う母の声　小菊
その当時の言葉で言えば「小町」　ゆきら
今くべたものを叱った母の鼻　紅寿
ふるさとを逃げた当時の人に会い　亀一
くべてしまっても尚追憶の　晴芽

ゴムをくべたこと父も母も祖母も言う　豊次
下駄くべて女貧しい手をかざす　あきら
夢はるか無名自炊の火をおこす　義行
傑作は無名のまゝで世に浮び　親生
気の毒な記事へ無名で来たお金　鳥雀
北側は山に続いたすその冷　九角
北側はもう売切れた分譲地　紫蘭
北側の窓から覗く雪女　光二郎
悲しみのま新しさを調べられ　司郎

雑川　**堺支部句会**（堺市）

二月十八日　於　摩天郎居
八木摩天郎報

腕力に勝てずライバル金もあり　摩天郎
腕力はもう過去のもの原子力　竹声
監督と云う肩書で言い寄られ　十悟
五色豆京の香りをたゞよわせ　圭水
親の気も知らず豆歌手眠たがり　好郎
サイン帖の思い出もたのし妻となり　素男
ウエルカムサインブックが待つ羽田　狂二
十代の誇りのひとつサイン帖　春翠
ピカ一はサイン帖にも巾をとり　雄声
姿婆に出た日を仕返しの日と決める　南風郎
仕返しの先に廻った松並木　佐久良
仕返しがちょっとこたえた妻のスト　雪山
仕返しを恐れてボスをはげこらせ　圭水
キリストを信じ仕返しよしましょう　春柳
美しい瞳で仕返しを待っている　賀峰

雑川　**鳥取支部句会**（鳥取市）

二月十三日　於　いすゞ販売店
大西八歩報

怪我をした子供に家がもめている　遊星
ボタン皆とれたシャツ着て独り者　喬水
金ボタンテストの前にかしこまり　陽月
目をそらせそらせ上手に嘘が云え　茗人
発展の妹姉より先に嫁き　ひろし
発展の今度は南へ切るテープ　鈍白
熊が出るとこも市内と展びにのび　日満
黙否権笑って仔猫ひざに置き　ます子
簡素化で会席膳が折と化し　しずえ
かまぼこが一切れ残る折を捨て　三歩
折詰の空できたない観光地　素飄
折詰を土産にする気手をつけず　天保銭
これだけは孫へと折の蓋をしめ　耕民
女房とまた折詰で飲み直し　昭夫

雑川　**日立櫻島支部句会**（大阪市）

二月六日　於　千代美居
丸尾潮花報

失業の愚痴さえ言えぬ日がつゞき　春子
同居して養子の愚痴へ気を使い　暉子
もう愚痴が出るほど恋も歳をとり　潮花
人形の瞳さえばかるひこと向き　千代美
人形の瞳に螢光燈はしる　菊母
いくつもの恋をあつめた人形の瞳　年子
夕焼のなかを使いの子が戻り　千也子
夕焼の富士へ新婚窓をあけ　定美
夕焼に気付いて帰る待ちぼうけ　豊子
日曜に逢えるに手紙なぞを書き　一子
母と逢うための夜汽車の冷えにいる　万亀子
雪の夜に逢えは真知子に似てかなし　花子
看板は師匠と書いて囲いもの　ひさみ
看板にないものもあるのにあきれ　花美
看板の魅力財布の口をあけ　年枝

雑川　**下関支部句会**（下関市）

二月十三日　於　下関駅
石川侃流洞報

先代で焼けて二代目に蔵も建て　雪達磨
ポストまで来て一通は止めて置き　良坊
飛梅の雨を気づかう社務所の灯　木陽子
元スターの人気で稼ぐバー開き　十字星
女優乗る映画宣伝カー徐行　かうたる
マイク良し街頭演説今日も派手　目丸
焼け跡へもうひくビルの設計図　蘇人
演説の聞きどこ電車消してゆき　九呂平
前人気あふる花火で蓋を開け　土筆坊
飛び梅にみくじを結ぶ願いごと　藤四郎
打ち水をバーひる頃の仕事とし　柳蛙
恐わゝくとスケート靴は立ち上り　柳慶
バーの灯をジングルベルが派手にする　侃流洞

雑川　**池田支部句会**（大阪市）

一月十七日　於阪急本社会議室
菊田いさむ報

懐手廓の門で立ち話　春造
懐手夜店の品へ顎を出し　没法子
庭石の位置が気になる懐手　杏花
算盤もちゃんとはじいた口車　圭三
しまい風呂しもやけ同志うまがあい　紫香
お隣りもアチャコ聞いてる壁一重　悦朗
長屋から嫁さんが出た騒ぎなり　淡舟
子が出来て長屋の友情わかりかけ　いさむ
オイコラですんで長屋にある平和　凡九郎
チンドン屋長屋の凪をかきあつめ　潮花
懐手出してニッコリ駒をつき　政雄
懐手部屋掃く妻の邪魔になり　清
懐手のまゝ心斉橋の灯にもまれ　ゆずる
ふところ手五万円程拾いたし　しげお
二月十二日　於　久米雄居
浜田久米雄報

行きがかり坂の車を押してやり　半仙
行きがかり二次会迄もついて行き　伊久野
迷惑が顔色にでる行きがかり　柳風子
行きがかり証人台に坐らされ　東岸子
里親が名残りを惜しむ汽笛なり　つじ
腕くんでもうそこ迄という名残　久米雄
楽天家らしい電話の長いこと　駄流児
余所目には楽天家にもある苦労　娯句楽
かき餅を延びよ延びよと焼いてやり　みや子

雑川　**大聖寺支部句会**（石川県）

二月十九日　於　貞人居
野村味平報

なぐられてピエロの役を活してる　貞人
癇癪は猫もそば杖くっている　久雄
胸に十字切って癇癪おさえ付け　桃園
運転手の癇癪降りて来てどなり　一恒

むら〳〵と癇癪の出る政治欄　味平
おでん屋の火鉢へマスク掛けたよ　とよ
招待が近いネクタイ買っておき　武富
鉢合せそしらぬ顔で通り過ぎ　酔羊
選挙戦悪友も一肌ぬいでくれ　素百々
集金へ夫婦の嘘が食い違い　光郎
PTA名取りも混るかくし芸　魯木

雑川　**倉敷支部句会**（岡山県）

二月十三日　於　観竜寺　田垣方大報

だん〳〵と話解って炭をつぎ　加志子
課長留守官費の炭が派手に燃え　流風
弟は炭まで借せとやって来る　千古
文化都市など〻バタ〳〵炭いこし　井泉
議論まだけりのつかない炭をつぎ　飴ン坊
手提にはスタイルブックとコンパクト　空頭
体裁に提げる手提はすぐ忘れ　閉人
十年も前の心になる手提　天風
娘もうこの手提では気に入らず　日出雄
迷信をかついで母は倖せな　秀魁
一俵もかつぐ噂の嫁が来る　鯉風
二俵米かつぐ自慢の話が出　千容
年寄りのかつぐ縁起へさからわず　春也
先棒をかついで罪を半分着　卯月
頼まれて片棒担ぐ姉の恋　一念
純情な方ねとおんな物足らず　方大
純情を花一輪にたくされる　広志
老妻は番茶の味に似てすなを　青也
純情な恋歩くだけ歩くだけ　素身郎
純情は唯肩先を寄せたゞけ　愁水
花言葉知らない花を入れ迷い　風来子
忍術で僕なら善政監視する　香春
忍術のように血税消えて行き　万古
忍術で消えたし義理に詰まる金　斜木
又債鬼あ〻忍術が使えたら　聴牌
追込みへ連呼活弁調となり　春日
子供にも手を振り返す選挙戦　千代春
選挙戦入れたい人が出馬せず　越鳥
事務長の肚で割り切る浮動票　兼平
落選をしてから金が惜しくなり　風の子
いずれ又汚職する気の選挙戦　桂月
落選の事務所にお茶がこぼれてい　耕水
遊芸にたけて宴会だけにもて　可笑
坊やまで「お願いします」をして遊び　五茶

雑川　**大原支部句会**（岡山県）

本田恵二朗報

いゝ人がいるので咳にも品をつけ　冲笛
花婿の咳へ高砂ちと乱れ　青美
サナトリウム母へ元気に咳いてみせ　坊太郎
新課長まだ〳〵型に入らぬ咳　時雄
暦では春が立ったと云う吹雪　恵二朗
友引で冥土の旅が二日のび　ふさ女
失業へなんと暦は有卦に入り　一山
バリカンへ逃げ腰の子を虎にする　雲峯
逃げ腰へマアマアマアの猪口でせめ　凡平
逃げ腰の断りかねた保証判　平八郎
女房は衿だけかえた初姿　幹二
飴持った子に初姿もつれられ　真
ぬかるみへ足袋が気になる初姿　笑女
初姿見合のときの帯をゞめ　喜美女
門松え歌麿画くように立ち　耕花
借りものゝ時計掏られた初姿　地久平
前身をちらりと見せた初姿　秋芳

雑川　**木次支部句会**（島根県）

於　木次町役場

藤井明朗報

聴衆の騒ぎ手伝う鐘三つ　俊昭
老らくの痴情騒ぎのあるホーム　迷調子
子沢山騒ぎがやまぬ日が続き　明暗
解け合って見れば笑い事ですみ　明朗
だっこした子が嬉しがる影法師　堀江
面影を抱きしめながら胸を病み　綾美
人影に猫の眼細く開けて閉じ　耕文字
別れ来てわびしい影を踏む夜道　馭句案
灯の影が一層侘しいものにする　清夢

雑川　**篠山支部句会**（兵庫県）

小西無鬼報

ハイヒール膝はくの字ですましてい　幸子
膝ついてレビューは派出なプロポーズ　和美
子を膝に編棒両手にしゃべってい　一風
お見合の膝にあの日のしみ気づき　昌愚
先生の話にあきた膝くずれ　洋牛
膝頭抱え貧相な顔でいる　喜天
使われる身の膝頭固う座す　ひか平
開けたての襖膝つくいい暮し　真砂
おてんばの袂の重い三ケ日　光子
着替えして晴れた心の初詣　小菊
気に入った鏡へ帯をポンと打ち　和美
身に合わぬ宿の着替のおかしくて　芳女
着替え中声だけかけて待たしこま　初穂
花嫁は衣裳直しで風邪を引き　吉野
床の中今日はどれ着て行く思案　冨士
着替とて親父の服の払下げ　洋牛
サムライの衣裳に替えたエキストラ　阿茶夫
貫禄がついて坐れた床柱　文子
床柱お札様だけ貼ってあり　拳坊
床柱ほめてお客は酌を受け　越山
床柱包んだまゝに上棟式　枝葉
遅刻して悠々坐る床柱　白猫児
床柱に坐り割勘倍とられ　尋四
このバッチもう恩給もっけて欲し　左文字
アベックの時はバッチを裏返し　無聖
親分も膝をくずせぬ刑事部屋　ゆたか

雑川　**阿倍野支部句会**（大阪市）

一月二十日　於　西光寺　須崎豆秋報

行き行けば電車の柵で突当り　太路
突当り昔此処らに川があり　賀峰
下むいて働け今年もそれでゆこ　恒明
予定した金はズボンだけが買え　武助
まねき猫今年の位置を替えてみる　鮎美
予定では十年先に家が建ち　没法子
今年こそ先手〳〵と打つつもり　十悟
飲みに行く顔宿直をうらやませ　万楽
今年そこ家が建ちます車中談　一三夫
二次会も予定に入れている幹事　豆秋
緬羊のあわれ裸に刈られたり　杏花
繁華街突当られた方で詫び　凡九郎
日曜の予定くるわす派手な客　梅志
今年も御ひいきと質屋の賀状来る　赤子
予定した利殖元金ごと喰われ　玄武洞
予定より出る事だけが増えてゆき　喜仙
裸だよ今年のデフレなに恐い　亜鈍
今年こそかたづける気の娘が居　路郎

雑川　**赤坂支部句会**（岡山県）

二月十日　於　苦石居　政田大介報

遠吠えを聞いてミシンを踏みっぱ　苦石
成功をすれば遠縁まで名乗り　兼比羅
テレビジョン京大阪の芸も見え　馬洗

政界の浄化は遠い疑獄劇　水呑
雑談のあと要件を少し足し　光峰
雑談も上手行商よく儲け　貞川
雑談へ紛らせ本心少し云い　大介
顔色を見て雑談のまゝ帰えり　宇柳
雑談の裡に商才売りつける　三四詩
善人の陳情正面から頼み　土生

川雑布哇支部　**ウイロー社句会**（ハワイ）

肩書が出来て冷たい人となり　閻魔王
肩書が針持つ母にして置かず　銀水
人間の弱さ肩書つけたがり　影法師
肩書がついて隔ての垣が出来　陽炎
出世した賀状肩書派手に書き　虹橋
結局は地位や肩書物を言い　迷朗
失言を消すに肩書邪魔になり　柳葉
肩書が大してものを云わなんだ　東田楼
就職へ前の肩書邪魔となり　伯楽
肩書も入れて女将は妓を口説き　草一郎
肩書へ娘よりも先に親が惚れ　馬喜々
肩書で小粒ながらも反返り　暁舟
肩書も云うて娘もやりそこね　魔花麗
肩書を捨てゝ平和の鍬をとり　拝山
出る所へ出れば肩書物を言う　泉水
日系の肩書道は巾広に　笑有
立候補ても肩書の多いこと　快夢起

大阪通信病院川柳会（大阪市）

一月二十九日　於　通信病院
森下愛論報

カフス釦はずしたまゝの聴診器　夏生
ワイシャツ位は洗いますわと二号さん　竹青
表彰の父はワイシャツ初めて着　同
ネルワイを着るという父の老い　春巣
吊皮のワイシャツ土曜日と云う疲れ　草右
賀状まで零落の身に近づかず　喜勇
句に歌に趣味の賀状の嬉しけれ　没食子
年賀状此奴達者で生きている　愛論
くじ付の年賀状です二度調べ　春巣
住所録のかわりに賀状仕舞つこき　方正
ヌードモデルに木枯のきびしすぎ　史葉
白雲悠々モデルの眼に流れ　同
撮影会惜しいモデルの脚が切れ　草右
黙々と道楽しらぬ平社員　ハナ子
社用族道楽だけが身に残り　恵風
渋い唄出して道楽もてゝいる　斜水
道楽の意見自分を例にとり　みのる
若い時した道楽が役に立ち　竹荘

南区医師会　**杏林川柳句会**（大阪市）

十二月二十一日　於　にしむら
中島生々庵報

そちらさん何か一つと三味が来る　比呂史
俗曲になって下座は気焔上げ　珊枝郎
高うついた都々逸風呂でもつこやり　阿茶
俗曲のたらい廻しにちとあわて　一伸
市丸をちかに聞いたが自慢也　生々庵
師走などそしらぬ様な自家用車　杏子
お歳暮で景気のわかる年の暮　悟路
断りはフラウまかせの十二月　一哲
日も金もたらぬたらぬで大みそか　杏子
十二月只落ち付かぬ月と知る　太希志
永生きと云われて淋し年の暮　珊枝郎
顔見世へそくりの着物見せにゆき　阿茶
年内に治してくれと無理な事　瑞川
何か買わざるを得ぬ気になる師走　比呂史
師走だってねえと釣り堀静かなり　生々庵

333川柳会（堺市）

二月九日　於　堺労働会館
川村好郎報

心配は俺に委せと酒をつぎ　南風郎
苦労性ですと心配ほっとかれ　玲人
心配な空を幹事として見上げ　万楽
終い風呂のれんを外すとこゝ来る　同
のれんわけ今も船場の風に染み　梅里
小さくとも老舗を誇るのれんなり　冗歩
御先祖ののれんに聞けと意見され　春柳
街角で犬御主人を見失い　圭水
街角へ来てつけ馬も汗を拭き　雄声
街角に交番が出来気がつよし　紋平
街角のポスト昔のまゝに立ち　武助
アルバイト街角へ来た眼にポカリ　夢遊
撥だこがもとの色香を物語り　一楽
三味ズラリ芸妓の卵ぞっとする　貴山
三味線が弾けて姐さん株にされ　夕翳
三味線の音が路地裏を粋にする　春翠
合の手は口三味線で間に合わせ　狂二
三味線へおかまいなしに唄い出し　素男
三味線も弾けぬ芸妓も交ってい　俊平
ほろ酔の口三味線へ犬が吠え　雪山
爪びきの合はぬ小唄をもて余し　満春
三味持って別れ話にふれさせず　好郎
三十代女房ぶりも板につき　佐久良
斗志満々三十代の顔の艶　玲人
おっさんと呼ばれ戸惑う三十代　一楽
惜まれて三十代の兄は逝き　夕翳
兄ちゃんと呼ばれてている三十代　広平
三十代まだくちばしが青いとさ　梅里
親子ほど違うに嫁ぐ三十代　摩天郎
三十代まだミスでいる社長秘書　狂二
動かない得意の殖えた三年目　夢遊

みをつくし川柳会（大阪市）

於　天王寺中学校
戸田古方報

古新聞カブト作って孫にやり　せつ子
古新聞安うまっせとだめおされ　光二
古新聞で昔の地位を説明し　梨花
海苔巻で動物園へ連れて行き　花香
組写真の一枚海苔が干してあり　古方
指揮権まで使うて大きな口止め　正斗
にっこりと腹の底読む聞き上手　義宏

帝化川柳会（大阪市）

二月十八日　佐野白水報

二日酔妻の顔には往けとあり　十九
この一票欲しさに尻尾隠してい　一星
妹の初出勤へ母は寝ず　豚平
井戸端の続き持ち込む台所　清童
得意先押しの強いこと〳〵　辰始
この一票平和な国にしておくれ　乱酔

季節一品料理
江戸前にぎりすし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店　**大萬**
★大万川柳（第五十回）を募る
兼題「弁当」　路郎先生選
締切・四月十五日（句数五句以内）
発表・四月二十一日（店内掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

公約はしゃべり切れない程に持ち　与呂志
バイ〳〵の声を出勤抱いてやり　一朗
台所新婚友に見せたがり　甲子朗
お得意を問われパチンコとは言えず　春潮
一票が狙われている年賀状　好祐
音痴にもあった得意の唄一つ　三平
貸ビルの台所にもお茶が沸き　一平
辻まではきっちり送る新世帯　雅堂
氷嚢を替えて一票入れに起ち　京一楼
倒産寸前お得意など〻言うこれや　白水
台所から味見の小皿届けられ　同

南海電鉄川柳会（大阪市）

於　粉浜親和寮

友淵貴山報

祝電の披露恩師の名もまじり　摩天郎
桐の葉がバサット落ちて雀逃げ　雄声
秋風に落葉踏む人寄せる人　一好
運動帽あみだ生駒の見える朝　啓三
テープ切る運動帽が宙にとび　南風郎
トンネルと誰言うこなく窓を閉め　雄峯
ふるさとはトンネルつゞく山の駅　凡九郎
トンネルを出れば団体又しゃべり　圭水
トンネルを出れば　クリーム買える駅　武助

川柳青蛙句会（西宮市）

於　西宮明和病院内

山本九里三報

病床に電波が送る初笑い　白鳩
盗み見る日記おろかな親心　立児
彼来る日看護婦髪をといてくれ　満秋
アパートの一部屋だけで楽しい灯　京
夢はるか家計簿羊を二匹飼い　鶏声
一プラス一が二で生き酒が友　九里三
北風をうけてアパート値も高し　鯛賀
押花も恋もあせたり古日記　茂美
アパートへ越して二号は働く気　貴美
アパートに居る間社長をパパと呼び　身素治
勝名乗りうけて引揚ぐみだれ髪　柴朗
湯上りの八重歯が光る乱れ髪　成詩
お馴染さんへ島田のほつれ直す妓の　弦月
明日に夢ありアパートの女たち　里奴
水垢離へいのちを懸けた乱れ髪　牧人

日置村青年団句会（兵庫県）

二月十二日　磯宮社務所

出口白猫児報

かつぎ屋の近道汽車の音がする　白猫児
商売の辛さ夕餉の箸を置き　ひか平
近道をする気が道に踏み迷い　無鬼
捨てられぬ恋へ婚約してしまい　左文字
子の使い約束の菓子先に取り　秋峯
公約へ任期四年が盛り切れず　莽花
約束をもどかしそうに奥で聞き　枝葉
婚約はしたが良縁あとで聞き　勉仲
あれ程の約束電話で断られ　低水
約束は約束だがとわびている　洋牛
当選にもう公約は忘れられ　秀水

玉野グループ句会（玉野市）

スタンドを総立ちにして打者還り　渡辺あきら報
スタンドの前のパラソル邪魔がられ　遠水
スタンドを消して詩想へ眼をつぶり　南風
荒れた手になって幸福とりもどし　あきら
手相では長命のはず肺を病み　馬笑
故里の川が車窓へきれいすぎ　ひさご
山と川だけの故郷へまた帰えり　陽石
選挙前だけの笑顔にすれちがい　耕音
年賀状来たので選挙思い出し　康夫
ユニホーム褪せているのが良く走り　青山
王手飛車かけて茶菓子へ手を伸ばし　恭史
風邪の子へ凧が浮いてる好い天気　川太郎
絶景へ一つ転ろげた握り飯　笑坊
母さんの留守に油が少し減り　美婦適
腰弁で三十年の生字引　正義
弁当の鰯が匂う守衛室　はじめ
生活の不安が風邪を押してゆき　敍打浪
あやこ

不朽洞会から

▼路郎師は四月九日午前六時四十五分からJOBK第二放送趣味のしおりの時間BK川柳の会課題「落選」の選評をされる。なお、昭和三十年度BK川柳の会放送選者は全局の委嘱により、路郎、水府、紋太の三氏とし、以上の順を以て逐月課題吟を選句放送される。▼阪田良坊医博は三月十五日の広島鉄道局病院長及各診療所長会議に出席された。▼戸倉菅天氏（兵庫県）は二月十六日沼貫中学で氷上郡内十六中学校の国語科教員の国語研究会で「川柳の変遷に就て」と題し講演をされた。▼福島鉄児氏（岡山県）の消息によると弓削町出身の桑民河原善右衛の顕彰運動に、川雑弓削支部が参画、丸山弓削平民脚色で二月廿一日廿二日大阪より都月の助劇団を迎え昼夜四回弓削劇場で開催。久米南地区各学校生徒の参観あり盛会、偉人顕彰に役立ったとのこと、今後岡山県下に逐次上演につき今後も後援するとのこと。なお鉄児氏は三月七日上京十日帰町された由。▼足立春雄氏（大阪市）は大阪逓信病院産婦人科医長として日本医療衛生新聞の依頼により、随筆床辺雑感を執筆、数句の川柳を交えられ好評を博された。▼阪田良坊医博（下関市）は三月五日に春帆楼が昔のままに出来上った被露宴に鉄道代表の一人として出席された由▼水谷竹荘氏（大阪市）は二月十四日上京、熱海温泉で一泊、西辻竹青氏は令閨同伴東京から日光、鎌倉、江の島信濃を廻って帰阪された由。▼小西無鬼氏（兵庫県）は三月十六日午前十時頃篠山川柳大会打合せのために来洞され路郎師夫妻と歓談、夕刻辞去された。▼長野晴浜氏（大阪市）は腎臓性高血圧で病臥されている。一日も早く全快をお祈りする▼延永忠美氏（岡山市）は三月十八日鳥取に出張、河村日満氏と歓談された。続いて米子へ出向き三鴨美笑氏を訪問の予定が猛烈な吹雪のため会えずに帰岡された▼石川侃流洞氏（下関市）は川雑下関支部の藤井米三翁が喜寿を迎えられたのと病気も快方に向われたので市外福王寺（長門一の宮）でその祝賀句会を計画されているとのこと▼石曾根民郎氏（松本市）は信濃毎日で川柳選評をされ活躍を続けられている▼弘津柳慶氏（下関市）は令兄弘津三男監督の「次男坊鳥」の映画批評をかね「兄を語る」を下関の新聞みなとに発表された▼北川春巣氏（理事長）は今回旭区大宮西ノ町八丁目五七番地へ転居▼長野井蛙氏（山口県）は在職三十七年で鉄道生活を勇退された移転先が定まるまで山口市西惣太夫鉄道官舎に居られる由▼河村日満氏（鳥取市）は米子の山陰川柳大会にしげきされ四月十日に因備交歓句会を鳥取で開催、貸切バスで種ケ池大砂丘見物の計画をしているとのこと▼須崎豆秋、山本葉光多胡春洋、木村十悟、伊達赤子の五氏が揃って二月廿二日夜不朽洞へ来訪、路郎師と歓談された▼中島生々庵医博は三月廿一・廿二の連休を熱海温泉に静養された（摩）

―社告―

▼川柳雑誌社京都支部幹事更迭。大鶴喜由氏辞任・後任幹事は田中鳥雀氏

公・私・雑・記

★ポカ〳〵暖かくなって来た。句会部では吟行のプランをたてねばならない★前々号が売切れたので前号から増刷した★私は三月六日に米子の皆生温泉で開かれる米子支部主催の山陰川柳大会へ前日に出かけた。駅前の花輪の前で支部の人達に迎えられた。スターの乗込みと云ったかたちだ。すぐに皆生温泉へクルマを走らした。美笑君、雄々君と温泉に浸った。美笑君を中心に雄々、戯耕の両君が大車輪で支部の人達をうごかし、六日の大会を迎えた。鳥取、松江、出雲、木次のなつかしい人たちが集った。出席者七〇、盛会だった。何れ次号に記事を掲げよう。★四月十日には篠山支部が篠山川柳大会を開催して全丹の柳人が集るので大阪からもデカンショの町の桜を見がてら出席することになった。出席希望者は連絡されたい。私たちは夫妻で出かける。（路）

柳・界・展・望

▼本社四月句会は、四月九日(土)午後六時から下寺町二丁目市バス停前の光明寺で開催される。句作の好学多数柳人を誘い合せ来会されたい。▼南区医師会川柳会は三月十五日午後七時半から杏子居で開催▼既報山陰川柳大会は三月六日午後一時から米子市皆生温泉友恭寮で開催、来会者七十名盛会なお路郎主幹の講演の一部がNHKから放送同日朝は路郎主幹と美笑米子支部長の対談を山陰ラジオが録音にし九日に放送▼南海電鉄川柳句会は三月十四日午後六時半から粉浜親和寮で開催▼大万川柳会主催本社後援第四回大万川柳総会を三月二十日午後一時から阿倍野区松崎町の大万で開催以上何れも路郎主幹出席。▼川雑淀川支部句会（大阪市）は四月六日午後六時から東淀川区三津屋北通四の香林居で開催兼題「桜」「午後」「臍」▼川雑堺支部句会（堺市）は三月十八日午後六時から第三回市長杯争奪句会として、九間町山の口摩天郎居で開催。なお第二回市長杯は吉村南風郎氏獲得▼333川柳句会は三月十六日午後五時半から島野工業会社会議室で開催▼川雑赤坂支部句会（岡山県）は三月五日午後六時から戸川医院で開催、優勝盃は光好三四詩氏獲得▼広島川柳会二月第一例会を十三日午後一時から広島市北榎町山本久雄居で開催、第二例会を二十五日午後六時から広島賀易館で開催、▼岡山電報局川柳会は三月十二日、同局で開催▼川雑阿倍野支部句会（大阪市）は三月十七日午後五時半から阿倍野区松崎町二西光寺で開催▼大阪市交通局川柳会は三月十六日午後五時から全局サンルームで開催▼川雑池田支部句会は三月二十二日午後五時半から阪急電鉄本社地下社員食堂で開催▼川雑倉敷支部では創立一周年句会を三月十三日午後一時から倉敷市本町観竜寺で開催▼川雑岡山支部句会は三月六日午後六時から山陽旅館で開催出席者五十名を超ゆる盛会。知事杯は一柳子獲得、川雑岡山楯は雨水氏獲得。▼川雑弓削支部句会（岡山県）は三月五日午後六時から弓削駅長官舎で第十五回町長杯争奪句会として開催。町長杯は簑流氏獲得。▼第一回近県川柳大会として愛媛、広島、山口の三県柳人会合大会を西し、山口県大島郡大島新潮社主催にて五月七日八日同県安下庄町安楽寺で開催される。▼川雑篠山支部（兵庫県）では路郎主幹夫妻を迎えて松花咲き乱れる四月十日午後一時から篠山川柳大会を同町孔雀会館で開催される▼神戸市婦人川柳会が三月十五日夜、神港新聞社企画の下に市民同友会で開催された▼川雑弓削支部（岡山県）では三月一日に句集「川柳町」第二輯を刊行された非売品▼増本翠露氏（本名茂）はかねてから阪大附属病院に入院されていたが三月七日午後六時に同病院で永眠された。謹んで悼む▼西川青美氏（神戸市）はコンゴーへ飛翔され、三月七日エリサベスビルから「森の褥天国だろか極楽島」の句信を寄せられた。▼阿部佐保蘭氏（東京都）は郷里丹後峯山への帰省の途次三月二十二日に来阪、路郎主幹を訪問されるとのこと▼津田千舟氏（貝塚市）からの消息に依ると、三月三日の雛まつりの当日、大阪日々新聞社後援の化粧品ヒナまつり懸賞に二等当選、豪華な雛人形（二万円位）受領され「現金で欲しい生活へ豪華ヒナ」の句信を寄せられた。なお千石荘川柳会員小島さぎす氏も同じ賞品を獲得された由▼梶川蘇堂氏は三月に大阪鉄道管理局大阪駐在運輸長付に転勤された▼西浜聖氏（路郎師愛婿）から「此の次は船にしようか地図の旅」の句信を寄せられ、机上旅行を楽しんでいられる由、一日も早く御全快を祈る。（摩）

正誤

▼前号中段北条文郷氏の発表句の末尾の「その金も長尻も横っ腹」の三句は永松東岸氏の句の誤記につき訂正▼前号三〇頁三段六行目「ストライキ」の作者は水茶氏の誤植

小児科
内科
平尾醫院
大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

募集

課題吟募集

売店（廿句）友淵 貴山選
灰皿（廿句）弘津 柳慶選（四月二十日締切）
予算（廿句）正本 水客選
風（廿句）高峰 柳児選（五月二十日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）北川春巣選 麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月廿日締切）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第十卷 第四号
定価 四〇円（送料四円）
半ヶ年 二六四円
一ヶ年 五二八円
昭和三十年三月廿五日印刷
昭和三十年四月一日発行
（禁転載）
大阪市住吉区内代西五丁目二五番地
編輯兼発行人 麻生幸一郎
大阪市住吉区内代西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
電話 住吉㊟六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇

昭和二十年七月十日第三種郵便物認可　（毎月一回一日発行）　昭和二十年七月十日第三種郵便物認可　（毎月一回一日発行）

THE SENRYU ZASSHI

NO・335

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

桜の国のさくらの名所

吉野山
吉野神宮駅
吉野駅下車

奈良公園
近鉄奈良駅下車

伊勢神苑
宇治山田駅下車

あやめ池
あやめ池駅下車
世界観光パラダイス

近畿日本鉄道

冒険物語
少年ケニヤ大会

☆主な内容☆
ケニヤパノラマ館・ケニヤ参考館・大自然のケニヤ草原・ケニヤ絵物語・こども劇場……休日アトラクション開催

5月31日まで
〔入園無料〕

近鉄道明寺駅・国分駅下車
玉手山遊園地

蓮葉で待ってゝねえと
今日も逢い　路郎

鹿乗料理
蓮葉
大阪　なんば

O.S.K
のレディメード

株式會社
大坂商店

大阪市東区糸屋町一丁目
電話東㊱一七四五番

第三五三號　川柳雑誌　定價四拾圓　送料拾四円